

# 相国寺御用達

京銘菓

## 雲龍

雲龍は相国寺に保存されている狩野洞春の龍画に感銘を受け創作した、京菓匠・俵屋吉富の代表的な名菓です。雲龍の奥深い旨さの秘密、それは精選された材料と、一本一本心をこめて巻いていく手づくりの味にあります。心をこめた贈り物に幸福を呼ぶ雲龍をどうぞ……。



# 圓月

平成二十二年正月号 第九十三号



大本山相国寺  
相国会本部



# 迎春

平成二十二年 庚寅

## ◆表紙解説

承天閣美術館事務局長 鈴木景雲

### 「竹虎図」(梅莊頭常賛との双幅の内)

伊藤若冲筆 江戸(鹿苑寺蔵)

若冲は実物を観賞して描くことを常としていたが、虎は日本には生息しない。本作は西賀茂の正伝寺所蔵の「伝季公麟筆 虎図」(季朝)を手本として書いたとされる。

日本に現存する虎の図は、古くは飛鳥時代(七世紀)に法隆寺玉虫厨子に描かれた「捨身飼虎図」までさかのぼる。

後、中近世には多くの画家たちの題材にされてきたが、とにかく日本にいない動物のため、中国や朝鮮の絵を模範とするか、想像や画人の想いで描くため、獷猛な姿、勇猛な姿、また猫がしゃれるような愛らしい姿、と様々に描かれてきた。この虎、舌をペロツと出し掌を舐めている。とても猛獣には見えない。実にユーモラスな表情で画かれている。



## 歳旦祝語

管長 大龍窟 有馬頼底

平成二十二年 庚寅年

### 歳旦

太陽の由来、不易の春

旧に依つて紅輪要津を照らす

靈艸瑞芝、香雨灑ぐ

青松竹緑、正に鮮新

大龍叟

太陽はめぐり、春はやってくる

依然として天道は大切なところを照らす

自然の動植物に香り高い雨が灑ぐ

青松も竹の緑もまさに新鮮であることだ



# 海蔵寺

9月27日



記念品を受ける五十嵐祖傳兼務住職



総代江信升雄氏謝辞

# 眞乗寺

9月27日



記念品を受ける木下雅教住職



総代平田一郎氏謝辞

# 蔵身寺

9月28日



佐分教学部長挨拶



総代武藤光氏謝辞

# 正法寺

9月27日



江上宗務総長挨拶



記念品を受ける本田真人兼務住職



総代村松武志氏謝辞



# 南陽寺

9月28日



記念品を受ける本田真人兼務住職



総代窪田蒸吉氏謝辞

# 正善寺

9月28日



記念品を受ける穎川孝生住職



総代石塚耕作氏謝辞



六斎念仏奉納





カラーグラビア◎真乗寺・海蔵寺・正法寺・蔵身寺・正善寺・南陽寺	2	
年頭御挨拶	10	
年頭御挨拶	13	
年頭御挨拶	16	
平成の修復から見えてきた国宝 観音殿	19	
御親教日単	28	
御親教寺院紹介(第四教区)	31	
御親教感想文	43	
真乗寺総代 勝本繁昭	海蔵寺総代 池田充宏	正法寺総代 一瀬道夫
蔵身寺総代 大下裕義	正善寺総代 松本規司夫	南陽寺総代 窪田泰吉
妙祐寺総代 松本詔三	元興寺総代 隅田啓三良	園松寺総代 時岡昭浩
積尊の足跡を訪ねて(三)	47	
演劇という道	71	
特別寄稿 現代社会のひずみを考える(慰霊祭に当たって)	77	
本山だより	82	
教区だより	89	
教化活動委員会活動報告	99	
カラーグラビア◎妙祐寺・元興寺・園松寺	101	
◎慈照寺 国宝観音殿保存修理	104	
承天閣だより「一心と技の饗宴」山口安次郎作 能装束展	106	
心のすがた	108	



管 承天閣美術館館長	有 馬 頼 底	宗 議 会 議 員
宗 務 総 長	真如寺住職 江上泰山	議 長 向陽寺住職 鈴木元拙
庶 務 部 長	玉龍院住職 坂根孝慈	第四教区 長得院住職 緒方香州
教 学 部 長	豊光寺住職 佐分宗順	第一教区 竹林寺住職 牛江宗道
財 務 部 長	林光院住職 澤 宗 泰	第二教区 法雲寺住職 大塚月潭
法 務 部 長	大光明寺住職 矢野謙堂	第三教区 善應寺住職 五十嵐祖傳
教 学 ・ 庶 務 部 員	普廣院副住職 山木雅晶	第四教区 保寿寺住職 藤岡牧雄
財 務 ・ 庶 務 部 員	長栄寺住職 鈴木景雲	第五教区 光明寺住職 松本憲融
承天閣事務局長	大應寺住職 久山弘祐	第六教区 普廣院住職 山木康稔
承天閣 参 事	普廣院住職 山木康稔	第一教区 竹林寺住職 牛江宗道
鹿苑寺 執 事	長得院住職 緒方香州	第二教区 善應寺住職 五十嵐祖傳
〃 〃 〃	是心寺副住職 和田賢明	第三教区 保寿寺住職 藤岡牧雄
〃 〃 〃	養源院住職 平塚景堂	第四教区 光明寺住職 松本憲融
慈照寺 執 事	桂徳院住職 小出量堂	第五教区 竹林寺住職 牛江宗道
〃 〃 〃	瑞春院住職 須賀玄集	第六教区 善應寺住職 五十嵐祖傳
相国会 総 裁	有 馬 頼 底	第七教区 保寿寺住職 藤岡牧雄
相国会 副 総 裁	江 上 泰 山	第八教区 光明寺住職 松本憲融
相国会 会 長	片 岡 匡 三	
相国会 副 会 長	錦 織 貞 久	
〃	波 多 野 外 茂 治	
相国会 本 部 長	佐 分 宗 順	

謹賀新年



管長 大龍窟 有馬頼底

新年明けまして御目出度う存じ上げます。

昨年中は、若狭寺院の巡教ではお世話に相成り、誠にありがたく御礼申し上げます。お蔭をもちまして終了いたしましたして、改めて思いますことは、各寺院ともに住職、寺庭の方々、檀信徒の皆様方の並々ならぬ御尽力のお蔭をもちまして、それぞれの寺院が立派に運営をなされていることに深く感動した次第であります。

今年から出雲地区を廻らせていただきますので何卒よろしくお願いいたします。

昨年は、数度の海外巡教をいたしましたでしたが、何ととっても、中国雲南省大理の崇聖寺の落慶法要に参りましたことでもあります。

この崇聖寺は、永らく荒れておりましたが中国側の熱意により見事に復興したのであります。一昨年に崇聖寺の代表団が日本に來られ、落慶法要の拝請を受けての訪中でした。

私としては七十五度目の訪中であり、中国の目ざましい発展にはおどろくばかりでありました。これの詳細は夏号に報告書があり、改めてお読みいただきたい。

さらに六月十日より中国浙江省寧波の天童寺、阿育王寺に登拜したのでした。天童寺は、相国寺の雪舟等楊禪師が学ばれたところで、

雪舟はこの天童第一座の称号を与えられて帰国してから大活躍をされたことはよく知られるところであります。前住職の広修長老八十八歳と二十八年ぶりにお目に懸れたことは何よりもうれしい事でありました。

去る十一月七日に、金閣寺客殿の障壁画製作を依頼しておりました、岩澤重夫先生が急逝されました。先生は先ほど文化功労者選ばれたばかりでした。謹んで御冥福をお祈りいたすばかりであります。

銀閣寺の国宝観音殿の修理も春には落成のはこびとなり、さらに研修道場も完成となります。これらは、新しい宗教文化活動の拠点となるべきところと期待しております。

どうか本年も、寅年であり元気を出してまいりたく、ごあいさつといたします。



本派寺院住職・寺庭婦人各位並びに檀信徒の皆様、明けましてお目出度うございます。皆様お揃いで平成二十二年の新春をお迎えのことと衷心よりお慶び申し上げます。降って本山におきましては管長猥下始め、内局並びに一山一同、お蔭を以ちまして無事新年を迎えることが出来ましたのも、これ偏に皆様のご指導とご支援の賜物と有難く御礼申し上げます。

昨年九月、日本の政治は大方の予想通り民主党鳩山政権に代りました。

鳩山首相は所信表明で、「人と人が支え合い、役に立ち合う『新しい公共』」を目指すと言いました。この美しい言葉を現実の形にしていくな政治力を発揮出来るか否かは新政権の大きな課題として真剣に智恵を出して取組んでもらいたいと思います。

一方我が相国寺に於きましては、管長猥下のご親教も七年目を迎え、昨年九月二十七日より二十九日迄の三日間、第四教区福井県若狭の高浜町東地区を訪問し開催されました。



各寺院は伽藍・境内を整備して、多くの檀信徒が山門前で合掌して一行を迎えて頂きました。

ご親教の運営は支所長であり善應寺住職である五十嵐祖傳師が教区で度々受入れの為の会議を開き遺漏なきよう早くから準備を整えて、寺庭婦人並に総代各位の協力のもと、昔から信仰心の厚い土地柄であり、各寺院住職と車の両輪の如くに尽力された事に対し、敬意を表すものであります。

私事乍ら私の生れ育った正法寺でも、檀信徒総出で特別の晩餐会を開いて頂き、満六十年ぶりに幼な友達や代替りした檀家の皆さんと旧交を温めました。

昨年のご親教を以って三年間に亘る第四教区のご親教を修了致しましたが、関係各位の大変温い歓迎を頂きました事に對し有難く御礼を申し上げます。

本年度からは、第五教区島根県出雲地区にお邪魔を致しますので何卒よろしくお願い申し上げます。

さて毎回申し上げておりますように、現在は特に宗教離れが進んでいるといわれていますが、又一方では若い人達に仏像ブームが起こっているようで、奈良興福寺の「阿修羅」の観覧に何十万人の人達が訪れて大変なフィーバーを起しました。そこで臨床仏教研究所では昨年春行ったアンケートをもとに研究所設立記念として「お寺の公益性を考えるシンポジウム」を開催し、寺院に對する意識調査報告が行われました。興味深い結果が発表されましたのでご紹介致します。

対象者は四十才から六十九才の一般男女六〇〇人への郵送アンケートによりますが、有効回収率は九四・三%、男女比はほぼ半数でした。

最初に、「あなたは昨年一年間にお寺を訪れましたか」との問いに、八十%近くが「訪れた」と答えました。

年齢が上がるにつれ訪れたという人の割合も上がり、その目的は、「お墓参り」が六二・八%と全体の過半数を占め、次いで「観光・旅行」・「法事」・「除夜の鐘」・「初詣」と続きました。

又参加したい行事には「お坊さんの説法を聴く会」と答えた人が三五・八%と最も多く、「坐禅」「落語・演劇・音楽会」などのイベント、「お葬式や戒名・お墓についての勉強会」と続きました。つまりお寺には、お寺を会場とした娯楽的なイベントよりも、仏教ならではの行事を期待する人が多いという結果となりました。

また、これに對して「あなたが死に直面した時、お坊さんが心の支えになってくれるか」との問いには、七〇%以上の人が「そう思わない」と答えています。

中には人は死んでから「仏」になると説き、法事の供養膳の席上、しこたま酒を食らい、口を開ければお布施の多寡のみを強要して檀信徒から響ひびく聲こゑを買かい、挙げ句の果てには、全檀家から離檀をしたいとまで言わしむるに至っては、「何をか言わんや」である。

宗教に對する期待とは裏腹に、お坊さんとの心理的距離は決して短くなく、信頼関係が築かれているとは言いがたい。宗教の公益性を論ずる以前に僧侶としての「基本」を守ることが大切である、とアンケート調査の結果を結論づけています。

新年を迎えるに当りお互い真摯に考えたいと思います。  
寒さ厳しき折、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。



有馬頼底管長猥下並びに本派寺院御住職、相国会会員、檀信徒のみなさま、新年を迎え、ますます御健勝のことと拝察いたします。

今年も又、よろしくお願いいたします。

管長猥下の三年間にわたる第四教区御巡錫御親教、誠に有難く感謝申し上げます。猥下はじめ御随伴のみなさま、御苦勞さまでした。この度の成果は、教区の各御住職、檀信徒、関係者各位が一つになって御尽力、御努力の賜であるとお慶び申し上げます。総代さまの「感想文」を拝読いたしました。猥下の慈愛に満ちた明るい笑顔で、しみじみと優しく語りかけて下さる法話に感動し、時には涙したとあります。みなさま待望の御親教であり、心からのお喜びがうかがえました。一宗の信者の尊崇を集め、多方面に活動実践されておられる猥

下、宗風拳揚と平和な世界を築く為に、今後とも、御自愛の上、酷使に過ぎませぬよう、御巡錫御親教下さいますよう祈り上げます。

開山夢窓国師毎歳忌、十月二十一日(水)本年も厳修されました。祖師の教えを代々遵守し、励み、法灯を固く守って今日に至ったこと、誠に意義深く、敬意を表するとともに檀信徒一同心から感謝申し上げます。この祖師供養という厳肅な宗教儀式に参じ、敬虔な思いで坐している時、改めて「支えられて、生かされて生きている」ことを痛感し、感謝し、一層、信仰の心を固くいたしました次第です。

第二十二回相国会本部研修会が十月十四日(水)、十五日(木)、一泊二日で二年ぶりに開催されました。充実した実りのある研修でした。管長猥下はじめ総長、関係御住職その他関係いただいたみなさまに心から感謝申し上げます。呼吸法を習い、数息観をくり返し、久々に澄みきった穏やかな心に浸ることができました。あわただしく日々を送っている生活の中であって、この度の研修は、足もとを照らし見る意義のある一時でした。今後の生活に如何に生かすか各人の課題です。坐禅の後、引続いて保寿寺閑栖藤岡大拙老師の「相国寺と足利義満」と題しての御講演がありました。基礎データの御説明をいただき、年代を追って具体的な逸話を加えながら、実に丁寧な、わかりやすくお話しくださいました。「春屋妙葩」師の御説明は、時間がなく宿題となりましたが、自

ら調べるきっかけをお作りいただきました。等々、誠に有難く感謝いたします。二日目の銀閣寺拝観、平塚景堂執事長の御法話有難く拝聴いたしました。庭園をめぐり、山頂近くの展望所から絶景を心静かに味わっていました。そこに四、五人の外国の婦人たちが「ビューティフル!」、「ワンダフル!」とおおげさなゼスチャーでやってきて、急に賑やかな場になってしまいました。その時、私は、今や世界の人々にとつて平和な魂の休息所は「慈照寺銀閣」なのだと痛感しました。仏教が数百年にわたつて我が国の精神の拠り所となり、日本文化と豊かな情操を育ててきました。その底には、調和の精神が流れています。そして今、ここに日本文化の集大成、人類の憧れの「鹿苑寺金閣」があり、「慈照寺銀閣」があるのです。

今日の物質文明のゆきづまりからくる、荒廃した人心を救う道はないものか、最大緊急の課題です。

最後に、私は、自らの心の「宝石」を怠ることなく磨こうと心がけています。常に、鏡の如く澄みきった心、「真心」をもって、今日、只今、一瞬一瞬を大切に悔なく生きたいものと思っています。

御教導の程、よろしくお願いいたします。

合掌

## 平成の修復から見えてきた 国宝観音殿

京都府教育庁指導部文化財保護課

国宝慈照寺銀閣保存修理工事主任

文化財専門技術員 中尾正治

巻末カラー写真104頁にて掲載

観音殿の今回の保存修理は、平成十九年十一月から事業期間二十九ヵ月を要して平成二十二年三月末日に完了する予定です。事業費は総額で一億三千九百万円を予算として、屋根葺替え及び破損箇所的部分的修理を行う工事方針で実施することになり、慈照寺が国庫の助成を得て、京都府教育委員会が慈照寺より事業の委託を受け実施しています。観音殿の修復期間はあと僅かとなりましたが、この修復が終わると同じくして修理工事内容の全容を誌す修理工事報告書を成果品として作成することになります。この報告書には修理中

に行った諸調査に基づいて精査と考察を行い、学究的に表現したものを結果として掲載することになります。

さて、それでは観音殿がどのような造形であったのか、將軍義政の造営に係る時期及びそれ以降に施された修理において改変が行われていたのか、今回の修理で諸調査を実施した結果、知り得たことについてその概要を多少の私見を付け加えさせて戴きながら述べてみたいと思います。

観音殿は、西芳寺瑠璃殿や義政祖父の義満が造立した北山殿舍利殿いわば金閣を範例に

して義政は祖父に倣って観音殿の造立を企てたのではないかとされていますが、義政にとつて観音殿の造立は東山殿で初めてではありません。義政は烏丸殿と室町殿に応仁の乱の前に観音殿を造立していました。足利將軍の邸宅には義満を創として邸を構成する施設の一つとして観音殿は不可欠であった。東山殿における観音殿の造立に際しては、乱後にも存在した金閣がやはり雛形になったのは至極当然であったと考えられ、当時としては斬新であった金閣造立の経過、その他先例を鑑みたとき、併せて乱後の新傾向の影響を受けたことから、今までに見ることのなかった進取の観音殿を現出しようと考えていたと想像されます。とは言つても金閣が金箔仕上げであるように、新造観音殿の閣が銀箔仕上げとする予定であったという確証をもつものではありません。

ところで、観音殿の「銀閣」の呼称については、万治元年（一六五八）刊行の『洛陽名所集』

に見出されるのが比較的早く、「銀閣寺とも言なり、北山は金閣にことならふとぞ」と書かれ、以後殆どの他書は「銀閣寺」と称していることから、江戸時代初期に金閣に対比するようにして銀閣と呼びはじめたように考えられます。銀閣の銀箔貼りについては、銀閣上層の外壁から採取した顔料など塗片の分析結果によりますと、金属反応は極微量であり、箔片の存在は考え難いというものであります。ことから、遺構でみた場合、銀箔を押しした形跡はなかったこととなります。そういったわけで、義政は観音殿上棟後の十一月に身罷っているので、銀箔仕上げが完成されなかったのではなからうかと憶測されますが、何れにしても観音殿が銀箔で覆われる計画であったという前提に立脚した推測に過ぎないものでしょう。

観音殿の上層外壁面には銀箔で覆われることはなかったとしました。ところが、黒漆塗りを室内外のほぼ全面に施していたことがこまれた柱頭飾、軒桁、垂木などに条帯紋、連続亀甲紋、雲形などの絵柄が採用され描かれていました。また、さらに柱間の板壁漆塗りの表面に白色土を薄く塗り付け、定着のための礬水（顔料を塗り易くするための下地材料）を塗布していることも分かってきました。

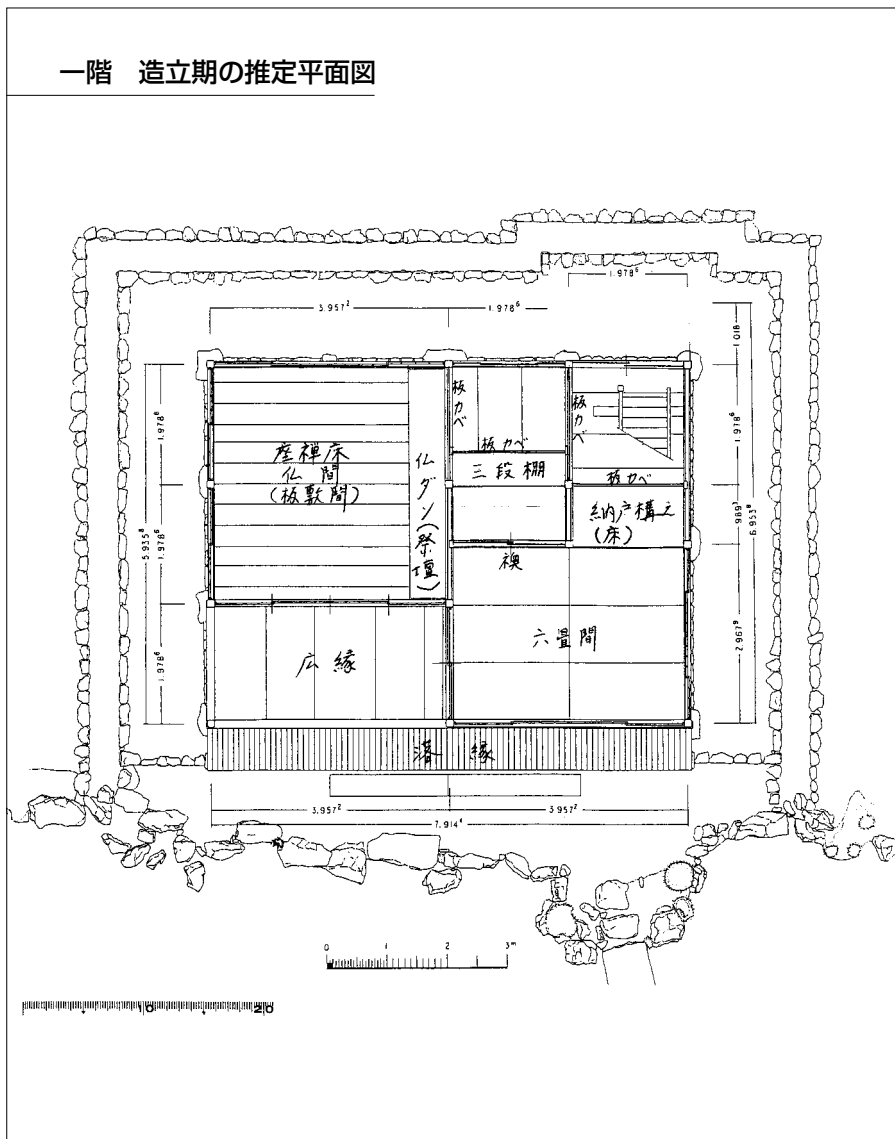
の度の修理で明らかになりました。この漆塗りの下仕事も現在でも多く残されており、密度の高い良質な施工が見て取れ、高度な仕上げであったことが窺えます。当時、漆塗りは、厨子・仏壇・仏像等の工芸品にはよくある仕上げ方ですが、外気に晒される建造物の外装面に漆塗りで全面を覆うという性格のものには早期に白蠟化及び劣化するなど耐候性に乏しいことからあまり建造することはなかった。しかしながら金閣は金箔下地に漆塗りがあつてこそ箔が押すことが出来ているわけで、そのことからいえば、金閣の方が漆塗りの施工された建造物として先例ではないかということになります。しかし小建築ながら中尊寺金色堂に金貼り仕上げの先例の遺構があります。観音殿には漆塗面の上に彩色顔料を使用し、紋様を描き留めていた痕跡が検出され、金属箔押しとはまた異なった表現をしていたことが分かりました。紋様は組物（柱の上に組

観音殿に描かれていた彩色紋様は仏堂内陣や厨子の上部、大画面になりますと三門の上層閣内に描かれている紋様に類似するものです。金閣の二層内部の一部に極彩色を留めている箇所が見出されていることは既に知られています。また將軍義持が造立に関与し、上層を「妙雲閣」と命名した東福寺三門にはその上層内部の全面に極彩色画が描かれています。このように堂内部の全面に亘って仏画や花文など極彩色で描くことは、醍醐寺五重塔初層内部や浄瑠璃寺三重塔初層内部など平安時代中頃からの裝飾表現ですが、内陣柱・来迎壁や天井などに施す部分的な彩色裝飾はそ

の初期までに行われていました。こういった彩色の建築への表現を建築彩色と称しています。建築彩色は仏教建築においては室内空間に限られていましたが、社殿建築にはそれより早期に外観に採用されていました。慈照寺観音殿は、上層の外観に建築彩色画が施されていましたが分かったのが、描かれた時期については観音殿造立の頃かまたは江戸時代初期に慈照寺再建の頃ではないかと考えられます。観音殿上層内外部の漆塗装の精査結果によりまずと、造立期と大正二年の解体修理による補修塗の二度が認められると報告されています。今回の修理で見出した建築彩色は漆塗り面に直接描かれていましたことと、絵柄及び絵具の剥落が著しく殆ど失われていたことから判断しますと観音殿造立期に描かれていたと想定しています。そうだとすれば、仏堂建築の外観が極彩色の建築彩色に覆われていた観音殿は、当時

として類のない存在であったと考えられます。次に、下層（一階）の間取りなどについても、現在の部屋の様子は、造立頃の部屋とは異なっていることが分かりました。それは残されていた柱などの部材の痕跡から見て取れ、初期の住宅書院造りの遺構とされる観音殿一階の形態が少なからずも明らかにすることができているのではないかと思います。現在の観音殿一階は庭池に向かった東面を正面とし、間取りは、南西室の板間を主室として計四間が配置され、主室の東側に広縁を配し、更に落縁を設けています。主室は東面の広縁側に腰高明障子を建て、南及び西面は窓として明障子を入れ、北面の東側一間は壁とし、西側一間は開放としています。床は板間、天井は二本棧の吹寄格天井として住宅建築では特異な形式としています。この主室は八帖間とした一階で最大の部屋に造り、床板は拭板敷として巾広の檜材を使用するなど格式の高さを認めさせます。部屋の北

一階 造立期の推定平面図



面の二間は元は板壁であつて、その前に祭壇を取り付けていた痕跡が見られます。義政は観音殿着工以前の準備段階で、一階には西芳寺瑠璃殿に倣つて坐禅床を設けるよう指示しています。一階の主室八帖板間は特異な天井として他部屋と区別し、それが僧堂であるかのごとく四面の壁の構成に窓を造り、明障子を建てたのだらうと解されます。この中敷居建ての明障子を紙を貼らない狭間障子と称しています。

一階の部屋のうち、北東の六帖間が唯一畳が敷き詰められたところです。部屋の東面が腰高明障子、南面は広縁境となり杉戸で仕切られています。北面は窓として中敷居を設け、明障子を入れています。西面の二間は土壁として何の変哲もない簡素な造りにしています。この平凡な壁の解体を進めましたところ、柱の面に現在使用されていない彫穴や壁板の溝彫などが多数発見できました。これら痕跡は江戸時代の仕事も複合しているのですが、観

と推察されます。しかしながら完成した観音殿は望んでいたとおりの形で出来上がっていたのではないかと想われます。

一階は、坐禅の床を配置することから、坐禅のあいだに池庭の景觀が望めることの出来る座敷を備え、また時には接客に供する装置を造り上げていると言えるでしょう。

二階は、観音菩薩を堂の中央に安置し、その両脇に禅宗様窓を造り、腰掛を設けているという空間は信仰上の用途に限定していると言えます。この方三間の一室空間は、究極の仏殿で在るがごとの存在に思えます。特筆すべきことは、上層閣にすることにより、天上位置であること、池庭を遠方まで望見する効果が得られることです。さらにその極みとして内外装を漆黒で覆うことであり、同時に極彩色画を描いた観音殿の様子は、庭の中心に据えられた観音を本尊とする大きな「厨子」のように私は今想えます。

音殿造立頃に造られたのが殆どではないかと考えられるものでした。見出された痕跡からは、次のような部屋内の造作が嘗て存在していたことが分かってきました。北側の一間は押板(踏込板か)、落掛の痕跡があり、納戸構えまたは床構えが造られていたようです。南側の一間は納戸出入口であり、その奥に膳棚と思しき三段の棚段が設けられていました。往時は唐物諸道具、茶湯道具などを保管する納戸のような場所が必要だったのと共に、接客の場としての機能を果たす座敷などが設けられたとするならば、この六帖間はその用途に供する部屋として存在していたとする考え方はできるのではないかと思つうわけです。

観音殿は、義政の東山殿を構成する重要な造営物の一郭として建てられました。西芳寺瑠璃殿に模した造形や用途を求めるものであったとされ、彼の生存中には完成を見ることのできなかつたことで心残りであつただらう

義政は、完成した観音殿を外気に晒した庭の構成要素とすること、併せて権威の象徴としての存在をも示すことを望んでいたのではないのでしょうか。

東山殿において東山文化が創成され、その枯淡美、さびの境地を愛好したものと解釈する傾向がありますが、東求堂同仁斎の室内装置、観音殿の一・二階の形式をみたとき、東山殿におけるその文化は寧ろそれとは正反対の華麗であり裝飾豊かな傾向を歓迎したものであつたと推測されます。

観音殿の修復の歴史経過には、今回の修復以前については、昭和五十六年及び昭和二十六年に屋根修理が行われていました。それ以前は明治二十七年の修理記(棟札など)があり二階高欄縁を修理していました。大掛かりな修復として大正二年九月より一カ年の工期で実施された解体工事があります。この修復工事に関しては工事実施仕様書などの修理記録が

残されてしまったので、工事内容の概要を知ることができません。その内容からは形式手法は旧規に倣った保存工事としたとされています。ところが、大半の部材が腐朽及び破損が甚だしいという理由から新材に取替えたことと誌されています。今回の修復で解体中に見られた取替部材から大正の修理内容が確認できましたが、取替えた部材にどのような痕跡が残っていたのか、またこのことについての記録・図面などを書き残していないため、今日では部材痕跡から観音殿の間取りなどの変遷をたどることは、極めて困難な状況になっていました。

大正の修復以前は、修理中に発見した墨書から、天明二年（一七八二）には二階の高欄縁、腰組、唐戸などを修復しています。

修理の経過は古図から判断して分かることでもあります。一階の北東角に突出している出入口の設置は元文三年（一七三八）から嘉永四年（一八五二）の間のことであり、また二階に安置

下の地下遺構調査を実施しました。発掘地層からは重要な遺構遺物は検出されませんでした。しかし地表より約二十糎は大正の修理で攪乱されましたがそれ以下の地層はほぼ近世初期以前の積層状の地層が残存していたとするものでした。このことの意味することは、観音殿は近世初期には現在の位置に建てられていたと見られると言うものです。江戸時代初頭に寺の庭、諸堂を一新するなどの再建が行われ、その結果新奇な景観が造り出されたこと『鹿苑日録』に記されています。宮城豊盛・豊嗣による慈照寺整備の中で観音殿も何らかの修復が施されていたと考えられます。黒川道祐の『東西歴史記』所収の「観音殿修理棟札」から、寛永十六年（一六三九）に観音殿を修理していたことが判ります。この文献に誌された内容を裏付ける江戸期の痕跡及び須彌壇の墨書銘が今回の修理中において発見できています。思うところこの時の修理は観音殿が現在位置

の観音像及び須彌壇は元文頃には南向きとしていたようですが、因みに現在では東向きになっています。屋根頂上の鳳凰の頭が東を向いていますので、方位を同じくしているのでしょうか。鳥類は頭を横にして物を見ているので、鳳凰は鳥類としますと横向頭が正面かも知れませんが、宇治平等院鳳凰堂正面の棟端にある両鳳凰は横向きに置かれています。観音殿に今据えられているものは大正三年に新調して取替えられていましたが、大正以前は「鵜鳥」であったようで、明治中期の古写真にはその形が見て取れます。では鵜鳥以前はどうであったかというのですが、安永九年（一七八九）の都名所図会に収載された絵図によりますと「擬宝珠」に描かれています。擬宝珠が観音殿本来の屋根飾りであったとするなら特に方位にこだわりはなく、安永以前であった頃の観音像の向きは南向きで差し支えないと言えます。

最後に、今回の観音殿の修復において、建物で在ったところに行われたのでしょうか。

以上、『圓明』の紙面を頂戴して駄文を書き綴りましたが、この内容は決して充分なものでは在りません。そのところ御容赦ください。紙面の限度を無視して観音殿修復中において新たに覚えてきたことについて記述をしてまいりましたが、これは現時点で判明した事項に私の思いを差し込ませて戴きましたものです。一階の間取りの改造は痕跡などにより、大正修理の頃には既に判明していたことであったと解されますが、前記しましたように修理は現状維持ということで復原する手段はなかったものと判断されます。ただ心残り、復元資料に関する調査の記録が一切保存されていなかったこと、復原の根拠となる痕跡の残った柱などの重要な部材を取り去り、保存されていなかったことに尽きます。

（平成二十一年十一月記）

# 御親教日単

有馬頼底管長、江上泰山宗務総長、佐分宗順教学部長、矢野謙堂教学部員(侍衣・記録)

## 9月27日(日)

午前7時20分 本山出発(専用車)

9時40分 眞乗寺到着、門前多数の出迎え、書院にて到着茶礼

10時 御親教開教、有馬管長、江上宗務総長、佐分教学部長、四教区五十嵐祖傳宗務支所長、眞乗寺木下雅教和尚が出頭、同教区尊宿方が司会、法要進行、維那等を務める

一、心経、消災呪、本尊回向  
二、大悲呪、開山回向

三、甘露門、檀信徒先亡回向

(※有住寺院は同式次第)

眞乗寺へ御親教記念品贈呈

(管長 狛下墨蹟書き下ろし)

管長法話、総長・教学部長挨拶

檀信徒謝辞 総代 平田一郎氏

11時15分 御親教終了、記念撮影、同45分眞乗寺出  
発  
正午 旅館「むらみや」で昼食

午後12時40分 先駆(支所長、教学部長・部員)「むらみや」出発、同50分管長、総長出発

12時50分 管長、総長海蔵寺到着、門前多数の出迎え、書院にて到着茶礼

1時 御親教開教、五十嵐祖傳兼務住職出頭

一、心経、消災呪、本尊回向・開山回向  
二、甘露門、檀信徒先亡回向

(※兼務寺院は同式次第)

海蔵寺へ御親教記念品贈呈

檀信徒謝辞 総代 江信升雄氏

1時50分 御親教終了、記念撮影、同55分先駆海蔵寺出発

2時5分 先駆正法寺到着、同20分管長、総長到着、書院にて到着茶礼

2時35分 御親教開教、五十嵐支所長、本田真人兼

務住職出頭

諷経後正法寺へ御親教記念品贈呈

檀信徒謝辞 総代 村松武志氏

3時40分 御親教終了、記念撮影、4時正法寺出発

4時20分 投宿先旅館「むらみや」に到着

6時 本山一行三人で薬石、江上総長のみ正法寺関係者と懇親会

午後12時35分 先駆「城山荘」を出発正善寺に向かう、同

45分管長、総長出発

12時50分 管長、総長正善寺に到着、門内多くの檀

信徒が出迎え、到着茶礼

1時 御親教開教、五十嵐支所長、穎川孝生住

職出頭

諷経後正善寺へ御親教記念品贈呈

管長法話、総長・教学部長挨拶

檀信徒謝辞 総代 石塚耕作氏

1時50分 御親教終了、記念撮影

2時5分 正善寺方丈前で、地元有志による六斎念

仏奉納

2時25分 先駆南陽寺へ向け出発、同35分管長、総長

出発

2時50分 管長、総長南陽寺に到着、多くのお出迎

えを受ける、書院にて到着茶礼

3時 御親教開教、五十嵐支所長、本田真人兼

務住職出頭  
当寺先住職桂寛洲和尚追悼諷経

諷経後南陽寺へ御親教記念品贈呈

管長法話、総長・教学部長挨拶

檀信徒謝辞 総代 窪田蒸吉氏

4時10分 御親教終了、記念撮影

## 9月28日(月)

午前9時30分 先駆蔵身寺に向け出発、同40分管長、総

長出発

9時45分 管長、総長蔵身寺に到着、多くの檀信徒

が出迎え、書院にて到着茶礼

10時 御親教開教、五十嵐祖傳兼務住職出頭

諷経後蔵身寺へ御親教記念品贈呈

管長法話、総長・教学部長挨拶

檀信徒謝辞 総代 武藤光氏

11時 御親教終了、記念撮影

11時20分 蔵身寺を出発「城山荘」へ向かう



4時20分 投宿先 旅館「むらみや」へ向け出発、同35分到着  
6時30分 薬石懇親会、本山四名、四教区尊宿十一名、同教区相国会正・副会長、会員一名が出席

迎え、書院にて到着茶礼  
12時30分 御親教開教、五十嵐支所長、本田真人兼務住職出席

## 9月29日(火)

午前9時30分 先駆妙祐寺へ向け出発、同40分管長、総長出発

9時45分 管長、総長妙祐寺に到着、雨天の中大勢の迎え、書院にて到着茶礼

10時 御親教開教、五十嵐支所長、穎川孝生兼務住職出席

諷経後妙祐寺へ御親教記念品贈呈  
管長法話、総長・教学部長挨拶

11時 御親教終了、記念撮影  
檀信徒謝辞 総代荒木猛氏

11時10分 「松風」へ向け出発、斎座  
午後12時10分 先駆元興寺へ向け出発、同15分管長、総長出発

12時20分 管長、総長元興寺に到着、門前多くの出席

1時30分 御親教終了、記念撮影  
1時50分 全員徒歩にて園松寺へ向かう  
2時 管長、総長園松寺に到着、大勢の迎え、書院にて到着茶礼

2時10分 御親教開教、五十嵐支所長、本田真人住職出席  
諷経後園松寺へ御親教記念品贈呈

管長法話、総長・教学部長挨拶  
檀信徒謝辞 総代湯淺勉哉氏

3時20分 御親教終了、記念撮影、管長、総長、教学部長と四教区尊宿方の同教区三年間の御親教無事円成を祝し、記念撮影

3時55分 本山へ向け園松寺を出発  
6時 無事本山到着

## 御親教寺院紹介

### 眞乗寺

〒九一九・二二〇一 福井県大飯郡高浜町和田第一一二号七  
電話〇七七〇・七二・一三三七〇 FAX 〇七七〇・七二・一九一五

山号 鹿王山  
開創 文亀二年(一五〇二)四月十六日  
開山 叟是有信和尚  
本尊 延命地藏菩薩  
脇侍その他 達磨大師  
寺宝 孔雀に牡丹の図 文珠菩薩の図 他  
伽藍構成 本堂 庫裡 薬師堂 江月庵 鐘楼  
寺域坪数 七二九・一二坪  
改修 本堂屋根瓦葺替(平成七年・一九九五)  
本堂東司改修及び江月庵改修  
(平成十四年・二〇〇二)  
住職代表役員 木下雅教(第十七世)  
徒弟 木下雅道  
年間行事 大般若会 節分祭 薬師祭 施餓鬼会  
達磨忌 他  
布教活動 達磨忌坐禅会

### ●由来・沿革

眞乗寺は、遠く奈良時代の創建と伝える。もと、鹿王山(現在の安土山)にあつて、眞言宗系に属する寺院と推定されるが、その草創年月等古代の寺録がなく一切不詳である。

往昔、相国寺開創の普明国師の禅風に帰依して相国寺末となり、臨済宗に所属した。即ち、叟是有信和尚(文亀二年・一五〇二、四月十六日示寂)を以つて開山と仰ぎ、爾来聯芳十七代を数え、この間の事跡は概略窺うことができる。

現在の寺域は、当山旧末寺の寺領であつたが、織田信長の時代に兵火にかかり、鹿王山より移りこの地に堂宇を建立、逐次寺門を興す。

明治元年(一八六八)、第十三世月川和尚代に庫裡及び仮本堂、鐘楼等を新・改築する。第十四世越宗和尚代、高塚・土蔵を改築、また和田薬師の森にあつた薬師堂を境内に移築した。第十五世文堂和尚代、

大正十四年(一九二五)に本堂再建を志し、同十五年(一九二六)十一月上棟、のち二カ年を経て完成する。第十六世文雅和尚代、客殿(江月庵)新築、鐘楼再建、位牌堂増築、昭和十九年(一九八四)には庫裡を再建する。その後寺域を拡げ、境内を整備して

今日に至っている。

境内には薬師堂があり、薬師瑠璃光如来が安置してある。伝えによれば行基菩薩御作と云われている尊像で、二十五年目毎に開帳法要を修している。

## 海蔵寺

〒九一九・二二〇五 福井県大飯郡高浜町下車持三号三六

山号 青龍山

開創 元亀二年(一五七二)一月二十八日

開山 慶周和尚

本尊 延命地藏菩薩

伽藍構成 本堂 庫裡 阿弥陀堂

寺域坪数 一〇三坪

辨權別(毘) 飛地六坪

改修 本堂・客殿増築(昭和十一年・一九三六)

住職代表役員 五十嵐祖傳(兼務)

年間行事 大般若会 施餓鬼会

### ●由来・沿革

海蔵寺は慶周和尚によって創立され、海蔵庵と称してきたが、寺伝、開創年月日共不詳である。従っ

て、慶周和尚(元亀二年・一五七二、一月二十八日示寂)を以って開山と仰ぐ。

しかしながら法燈は大いに揚がり絶ゆることなく、歴代の師は連綿たる心印を継承し、檀信徒をよく教化、寺門益々興隆した。その間には中興の師もあるが、その偉業については詳らかでない。

明治十二年(一八七九)に第十一世千葉明潭和尚は、星霜久しくして既に昔日の形骸正に陥んとする堂宇の現状を憂い、一大補修の大願を立て、檀信徒と能く謀り補修再建の業を大成した。現在の瓦葺本堂がこれである。

のち昭和十一年(一九三六)、森菱州和尚はさらに本堂、客殿を増築する。

なお、境外に仏堂二字あり、阿弥陀如来を祀つてある。

## 正法寺

〒九一九・二二〇六 福井県大飯郡高浜町上車持八の三

山号 白瀧山

開創 永禄六年(一五六三)

開山 陽堂恵春禪師(文亀二年・一五〇二・三月寂)

開基 陽堂恵春首座

本尊 延命地藏大菩薩木像

脇侍 如意輪観世音菩薩木像・達磨大師像

伽藍構成 本堂兼庫裡 毘沙門堂

寺域坪数 一七三坪

住職代表役員 本田真人(兼務)

年間行事 ご祈祷(二月二十七日)

涅槃(二月十五日)

花まつり(五月)

施餓鬼(八月十三日)

達磨さん(十一月四日)

### ●由来・沿革

「若州管内社寺由緒記」によれば「永禄六年(一五六三)白石山城粟屋右衛門太夫殿建立と申伝候」とあるが、正法寺においては草創年代不詳という。

開山は陽堂恵春禪師、文亀二年(一五〇二)三月二十六日示寂。明治十七年(一八八四)第九世謙堂和尚の代に現在の堂宇を建立して今日となる。境内に毘沙門堂あり。本尊毘沙門天は同区の守護神として、毎年初寅をもって祭祀が行われる。

## 蔵身寺

〒九一九・二二一六 福井県大飯郡高浜町子生二四の九  
電話 〇七七〇・七二・一六五二

山号 北斗山

開創 天正年中(一五七三〜九二)

開山 融雲富通和尚

本尊 千手観音菩薩

伽藍構成 本堂兼庫裡 三宝大荒神祠

寺域坪数 一三六坪

辨權別(毘) 集会所三七四坪

改修 明治三十七年(一九〇四)新築

住職代表役員 五十嵐祖傳(兼務)

年間行事 正月新年会

施餓鬼会(八月十五日)

達磨忌(十一月二十三日)

布教活動 老人会 説教

地域活動 村主催・大般若会(二月)

日待会(春・秋)

### ●由来・沿革

藏身寺は若狭高浜の子生にある。子生は「こび」と呼び、古い開村の歴史を誇る谷あいの村である。珍しい地名であり、由来を語る伝説がある。その惣村の寺が北斗山藏身寺で、「北斗裏藏身」を寺名としたものである。この村に相応しい名である。

延宝三年(一六七五)若州社寺由緒記に

「禪宗京相国寺末藏身庵開基融雲富通禪師開基時代不知 藏身庵住持由丹」と記録されている。

また元禄五年(一六九二)改帳によると

「開基融雲富通座元天正年中示寂建立者諸檀那中名寄一石一斗四升八合年貢地也」

とある。

昭和六年(一九三一)刊福井県大飯郡誌に

「藏身庵臨濟宗相国寺派子生字柏谷に在り寺地一

一九坪境外所有地八反二畝二十七歩檀徒数二十八戸本尊千手観音堂宇九間七分五厘と五間由緒天正中融雲創立」と述べている。

寺史には、明和七年十世快享上座の代に再建、現在の堂宇は明治三十七年(一九〇四)に新築との記録がある。更に近年仏壇および堂宇内外の大改修を施し、従来の面目を一新した。

この村は惣村の絆が強く、新年には国土平安邑中家内安全祈禱大般若会を藏身寺住職導師によって修行する。また当寺境外松原山に観音堂がある。春秋彼岸の中日には邑中総檀中参籠する。邑中各家安穩を祈念、般若心経一千巻を読誦奉納して祈禱札を授受する。

このように藏身寺を中心に、深い信仰心によってこの村の人々は固く結ばれている。

## 正善寺

〒九一九・二二二四 福井県大飯郡高浜町齒部四七の一三  
電話 〇七七〇・七二・〇五一四

山号 圓嶽山

開創 天文年中(一五三二～五四)

開山 建月寅公禪師

本尊 十一面観世音菩薩

脇侍その他 丈六阿弥陀如来(平安期)

伽藍構成 本堂 位牌堂 庫裡

寺域坪数 五七六坪

住職・代表役員 額川孝生

年間行事 降誕会(花まつり) 涅槃会 大般若会  
彼岸会(春・秋) 達磨忌

成道会(齋講々員参詣) 法話

布教活動 毎月一回齋講及右記行事法話

地域活動 齒部区回村大般若会(毎年二月第三日曜)

六斎念佛(盆行事)

地藏盆

### ●由来・沿革

天文年中(一五三二～五四)建月寅公禪師の創立と伝えられているが、確実な草創年月は不詳である。

開山禪師の示寂については、永禄元年(一五五八)

三月一日と伝えられているが、後年、天文八年(一五

三九)四月十八日に改めたと大飯郡誌にある。

享保六年(一七二二)に益叟和尚、旧方丈を建立、寛政十年(一七九八)正巖和尚この方丈を瓦葺屋根に改め、降って明治十七年(一八八四)俊嶽和尚代に至り、更に旧方丈を改築。

本堂は明治二十五年(一八九二)十二月建立。位牌堂は昭和二十六年(一九五二)七月建立(正眼和尚代)。庫裡は昭和五十六年(一九八一)六月に新築(忠俊和尚代)。庭園は平成八年(一九九六)八月竣工。位牌堂には、丈六阿弥陀如来坐像が安置してある。平安期の作で、高浜町指定の文化財になっている。

阿弥陀如来像は、もと齒部の円福庵の本尊であったが、堂宇を廃し、その寺号を当町関屋の新寺に譲り、事実上廃寺となるに及んで当寺に移し、今日に至っている。

境内には町指定天然記念物「さるすべり」の木がある(高浜町誌)。

〔註〕禪宗相国寺末 正善庵

開山建月寅公座元 開基 時代不知

正善庵住持 周泉

〔註〕相国寺末 円福庵  
開基 玖柴比丘尼 時代不知

円福庵住持 古定  
(高浜寺院由緒記)

## 南陽寺

〒九一九・二二二五 福井県大飯郡高浜町宮崎四三の一五  
電話 〇七七〇・七二・一四七四

詠歌会齋講(毎月十六日)

地域活動 子ども会 坐禅会

### ●由来・沿革

潮音山南陽寺は、その名のとおり日本海(若狭湾)の磯辺からほど近い、日ごと浪音を聞く、平地の町なかに立った南向きで至極く日当りのよい小寺である。

元禄五年(一六九二)改帳によると、「南陽庵開基三因受益首座文禄元年示寂建立者福田八郎来歴失念寺内当町並御赦免名寄一斗七升三合六勺八才年貢地也」とある。

寺史には天正八年(一五八〇)八月、福田八郎が三因受益和尚を請して開山とし、南陽庵を開基したと記録している。開基開山とも来歴不詳であるが、古い木主が現存している。大正三年(一九一四)に南陽寺と改めた。

天正八年(一五八〇)開基以来四百二十余年を経

山号 潮音山

開創 天正八年(一五八〇)八月

開山 三因受益和尚

開基 福田八郎

本尊 上品阿弥陀如来(享保四年)

協侍その他 千手観音菩薩

伽藍構成 本堂兼庫裡 付属建物 境外薬師堂

寺域坪数 三〇九坪

齋壇坪数 薬師堂三〇坪 竹林一〇〇坪

改修 平成三年(一九九二)

住職代表役員 本田真人(兼務)

年間行事 正月新年会

涅槃会(三月十五日)

花まつり(五月八日)

施餓鬼会(八月十五日)

達磨忌(十一月五日)

布教活動

説教(都度)

る間、堂宇は改築改修を繰り返した。今の堂宇の小屋組は安永三年(一七七四)再建の時のものようだ。かなりの古材であるが平成三年(一九九二)に大改修を施したので、まだ当分は維持できる。

江戸期中葉に、檀那中、野田庄右衛門・野田善兵衛(ともに小間物屋)両家が勃興し、当寺の護持に大きい功績を残している。この両家は若州小浜藩(酒井家十二万石)の藩史にもその名をとどめている。

また江戸後期になると、寺子屋に使われて大縁の天井、柱、大鴨居に寺子の筆の落書きが無数に残っていた。しかし昭和十年(一九三五)の改修ですっかり影を失った。

なお、境外、字石塚に薬師堂があり、元禄七甲戌

年(一六九四)三月八日開創の縁起書、二十五年毎の開帳記を残している。縁起には如来のお慈悲弘大無辺「はやり病吹きはらう」と説き、御開帳奉讃の功德無量を謳う。

霊験あらたかな「石塚軒薬師」と地域住民の信仰を集めている。平成十八丙戌年(二〇〇六)四月九日、十三回目の御開帳を勤修した。因みに、打ち鳴らす真前の鰐口は、享保三戊戌年(一七一八)卯月八日の銘入りで初回開帳に奉納されたものである。

このように当寺は、さほどの由緒、寺歴、寺宝等を持たないが、幸いにも大本山相国寺末の榮譽を与えられ、四百二十余年営々と法灯を点し、その時々にならぬ輝きをきらめかせつつ今日を迎えている。

## 妙祐寺

〒九一九・二二二二 福井県大飯郡高浜町岩神一四号五

山号 天珠山

開創 天文年中(一五三二)より

開山 永禄元年(一五五八)までの間と推定

本尊 建月寅公禪師

伽藍構成 本堂兼庫裡 毘沙門堂

寺域坪数 二四四坪

住職代表役員 穎川孝生(兼務)

年間行事 积尊降誕会涅槃会

毘沙門天祭(大般若転読)

彼岸会(春・秋)

達磨忌

成道会(齋講々員参詣)

法話

布教活動 上記行事法話

齋講々員参詣(毎月八日)

地域活動 毘沙門天祭 地藏盆

●由来・沿革

高浜寺院由緒記に次のように記されている。

同寺妙祐庵昔は念光院と申候

逸見駿河守殿一家の寺にて寺領も百石被下候

其後駿河守殿死去にて法名妙祐と申候故寺号改

申候

寺領は秀吉公被召上候由申伝候

妙祐庵住持 周听 (高浜寺院由緒記)

## 元興寺

〒九一九・二二二九 福井県大飯郡高浜町三明第二号三九番地

山号 豊春山

開創 天正元年(一五七三)

開山 章嵌玉首座

開基 浅野久太郎(逸見公家臣)

本尊 聖観音菩薩

脇侍 白衣観音菩薩・章嵌禅師坐像

寺宝 聖観音菩薩像 白衣観音菩薩像

章嵌禅師坐像 聖徳太子図

伽藍構成 庫裡 法堂 観音堂 地藏堂

寺域坪数 約九〇〇坪

改修 天正年間(一五七三〜九二)替地現在位

置に移転

住職代表役員 本田真人(兼務)

年間行事 涅槃会(三月十五日)

施餓鬼会(八月二十五日)

達磨講(十一月五日)

布教活動 太子講(年二回)

観音講(毎月)

地域活動 高浜佛教会で花祭り(毎年五月三日)を開

催し、お菓子などを配り町内を巡行

●由来・沿革

元興寺は初め寿福寺と称していたが、天正年間(一五七三〜九二)替地して今の寺地に移った。開基は逸見公家臣・浅野久太郎殿、章嵌玉首座を開山に仰いでいる。

元内浦村鎌倉の寿福寺住持江印伝和尚が今の地に伽藍を修造し、師匠章嵌禅師を拜請して開山に、自らは二世の座に就いて、寿福寺を改め「元興寺」と称した。

開山章嵌禅師は、高浜城主逸見駿河守家老魚住氏の出身で、天正六年(一五七八)五月二十一日に示寂。寛政年間(一七八九〜一八〇二)第十世提尚和尚代に現在の伽藍を再建し、次いで大正二年(一九一

三)瓦葺きに改め今日に至っている。

境内仏堂に観音堂がある。第六世誠堂和尚が槓山寺の遺什白衣観音像を奉じて観音堂を建立安置したが、十二世関海和尚が文政七年(一八二四)八月十四日再建、降つて明治二十六年(一八九三)災火のため惜しくも焼失した。明治四年(一八七二)四月第十六世容堂和尚が現在のお堂を建てて今に伝えている。本尊白衣観世音菩薩の御開帳は三十三年目ごとに行われる。

観音堂に並んで地藏堂がある。「誠堂さん」の名で通り、庶民の信仰篤く毎夕日参する人が多い。誠堂和尚―ここにおいて入定と伝えられ、地藏尊が祀られている。

## 園松寺

〒九一九・二二二五 福井県大飯郡高浜町宮崎七四の四  
電話 〇七七〇・七二・一六六八(FAXとも)

山号 中嶋山

開創 天正九年(一五八一)

開山 永門如是(ようもんによせ)

開基 逸見昌経

本尊 釋迦牟尼佛

寺宝 本尊釋迦牟尼佛 木造逸見昌経坐像

木造地藏菩薩立像 他多数

伽藍構成 庫裡 法堂 地藏堂

寺域坪数 約九〇〇坪

禿禪別荘 薬師堂約一〇〇坪

改修 慶長十三年(一六〇八)中興、現在位置に移転

住職代表役員 本田真人(第二十四世)

年間行事 涅槃会(三月十五日)

逸見祭(四月二十六日)

達磨講(十一月五日)

布教活動 薬師講(毎月八日)

地域活動 高浜佛教会で毎年五月三日に花祭りを開

催し、お菓子など配り町内を巡行する

### ●由来・沿革

園松寺はもと昌福寺と称し、その創建について、園松寺文書『中嶋山園松寺由緒書』によると、天文年間(一五三二～五五)に高浜城主逸見昌経(一五八一)が開基となり、昌経の帰依を受けた永門如是(一六〇六・園松寺開祖)が昌福寺を開山したとある。この『由緒書』中の天文年間は天正年間(一五七三～九二)の誤記と思われる、逸見昌経が没した天正九年(一五八二)を創建としている。

その当時は現在の赤尾町付近に建立されていたとの伝承があり、前述『由緒書』には慶長年間(一五九六～一六一五)に高浜城主佐々義勝(一六一四)の帰依を受けた湖岳周繁(一六五二・園松寺第三世)が、現在地に寺地を移転させ、寺号をその地形になぞらえ「中嶋山園松寺」と改称したことを記している。湖岳周繁については、園松寺に四十五年間在住したことを示す記録があり、没年から差し引

くと慶長十二年(一六〇七)頃に中興したと推測でき、園松寺第五世の天外梵知(一七一八)は慶長十三年(一六〇八)を中興年としている。

### 逸見氏と園松寺

高浜城主逸見昌経は死後、『逸見氏系図』によると菩提所として建立した昌福寺(園松寺)へ葬られており、園松寺の墓地にはその墓塔と伝わる五輪塔が建立されている。昌経の領地は織田信長により信長の家臣丹羽長秀に属した溝口秀勝に所管されたため、逸見士族や家臣の大半は丹後田辺城主の細川家に召し抱えられた。

園松寺文書中で逸見氏に関する記録は、元禄十年(一六九七)に移封のため、宇都宮から丹後宮津の宮津城主となった奥平昌春とともに入封した、奥平家臣逸見三郎兵衛久長の書状まで確認できない。内容は、思いがけない移封により先祖の仏前で焼香するという積年の念願がかなったことを認めている。翌十一年には、久長より久長家臣の志村源太夫を名代として、園松寺へ『逸見氏系図』を奉納している。

天明八年(一七八八)には昌経の二百年遠忌の法要が営まれており、その法要を記録した『宗登大居士二百年遠忌之記』の中に逸見昌経坐像の奉納についての記述がある。昌経の坐像は、逸見氏末裔の逸

見与一左衛門(逸見久邦・一八〇五)が奉納している。与一左衛門は丹後竹屋町(舞鶴市)の豪商で、俳人として『逸見木越』の俳名をもち、逸見家の菩提寺として建立された妙法寺で句会を度々開催していた。また天明元年(一七八一)には、日蓮信徒である与一左衛門は宗祖日蓮の五百年忌に際し、『身延山参詣記』を自筆本として遺している。

現在でも園松寺では、昌経の命日には「逸見祭」(現在は四月二十六日に実施)と称して毎年法要が営まれ、与一左衛門が奉納した昌経像に手を合わせ供養されている。

### 大本山相国寺と園松寺

近世に入り本山と末寺という本末制度の中で、園松寺は臨済宗相国寺派に属し、本山相国寺と塔頭寺院より若狭国内に所在する三十四ヶ寺を統括する觸頭寺院として存在していた。若狭国内の寺院を監督する相国寺塔頭の光源院からは頻繁に申達書が出され、中でも『園松寺派下中規定書』(安政二年・一八五五)には、万一園松寺の法系が断絶した場合には、光源院か慈照寺(銀閣寺)の住職が相続することや、無住寺院の兼務・住職の交代・什物の取扱い等について、觸頭の園松寺の指揮を受けることを指示している。

### 園松寺歴代住持とゆかりの禅僧

園松寺は昌福寺時代の永門如是を園松寺開祖の第一世とすると、現在の本田真人住職は数えて第二十四世にあたる。近世においては、若州觸頭役であったため、園松寺には本山より派遣された住職が歴任され、また園松寺の住職が本山と塔頭寺院の要職に就くこともあった。本山塔頭寺院の光源院には、園松寺第六世の覚瑞祖了(一七五九)が第十四世として、園松寺第七世の南巖妙喬(一七三五～六一)が第十五世としてそれぞれ園松寺から入院している。南巖妙喬は園松寺檀家中の時岡右衛門家から出家した方であったが、二十七歳の若さで遷化したため、南巖妙喬の遺志を受け、氏の実兄で梅莊顯常(一七一九～一八〇二)のもとで修行中であつた維明周奎(一七三一～一八〇八)が光源院第十六世として入院している。維明周奎は、後に本山相国寺の第百十五世となり、相国寺の住職を勤めた。時岡右衛門家からは維明周奎をはじめ多数の高僧を輩出しており、中でも橘洲周傳(一七九三～一八六四)は慈照寺(銀閣寺)の第十五世となつた後、本山相国寺の第百二十二世となっている。相国寺史料『萬年山聯芳録』(卷之三)によると、周傳は幕府より「朝鮮修文職」を任せられ、安政五年(一八五八)から万延元年(一八六〇)の三年間、対馬に渡り対朝外交にあつたことが記録されている。

## 園松寺と維明周奎

維明周奎が生きた江戸時代中期の相国寺は、伝統ある禅宗文化の拠点として多くの人々を惹きつけていた。その代表が奇才の画家として知られる伊藤若冲で、『萬年山聯芳録』（巻之三）の光源院維明周奎の項には、伊藤若冲より画技を学んだことが記されている。相国寺住持の漢文詩の名手で、五山最後の文学僧として高い評価を与えられた梅莊顯常（大典顯常）は、若冲と深い交友を結んでいた関係で、その梅莊顯常の弟子であった維明は、若冲より直接絵の手ほどきを受けることができる機会に恵まれていたと考えられる。

禅宗を基盤に展開した維明周奎の絵画は、個性的で幅広く、写実的な「頂相」のほか「達磨図」や「観音図」といった道釈人物画、文人墨戯の影響を受けた「墨梅図」があり、若冲の影響を受けたことがうかがえる奇抜な構図で描かれたものも数多く遺されている。維明が遺した作品の中で最高傑作といわれているのが、文化四年（一八〇七）に再建された相国寺方丈の、西の間の襖絵として描かれた『老梅図』である。

維明周奎は京都画壇のなかで禅僧画家として確固たる地位を築き、江戸時代中期から末期まで京都に居住する文化・学術分野の著名人を掲載した文化

人名録『平安人物誌』（天明二年版・一七八二）に登場する。また、文化四年（一八〇七）九月には、円山応挙（寛政七年・一七九五没）を偲ぶために行われた追悼展に『雪梅図』を出品しており、その出品目録『櫻齋翁追薦展観画録』（文化四年・一八〇七）に名前が掲載されている。

東京国立博物館には松平定信（一七五八〜一八二九）が、谷文晁に全国の土地の知名士・文化人四十六名の肖像を描かせて座右に置いたと伝えられる『近世名家肖像図巻』が所蔵されているが、そこには梅莊顯常の肖像画とともに維明の肖像画が掲載されている。維明の肖像は、光源院と生家である時岡右衛門家にも存在しており、特に時岡右衛門家に遺る肖像画は、維明自身が顔を水鏡に写して描いた自画像である。

維明周奎は園松寺の什物の充実を図るため、『絹本着色阿弥陀来迎図』『絹本着色春屋妙葩頂相』『絹本着色仏涅槃図』、原在中に描かせた『高濱盛夏図絵』などを寄付し、橘洲周俣からは『紙本着色十六羅漢図』と『絹本着色達磨図』等が寄せられ、それぞれが園松寺の寺宝に多様な表情を与えている。園松寺では、歴代の住持が使命感をもつて寺宝の散逸を防ぎ守り伝えている。

御親教  
感想文

## 眞乗寺御親教に思う

眞乗寺総代 勝本繁昭

平成二十一年九月二十七日、爽やかな秋晴れの午前九時三十分予定通りのご到着となられ、大勢の檀信徒が門迎する中を、親しく会釈をなされながら本堂の中へと入って行かれました。

御親教のため大本山相国寺より有馬頼底管長殿下、江上宗務総長様、佐分教学部長様、ご一行様を眞乗寺にお迎えできましたことは、眞乗寺檀信徒にとりましてこれ以上の喜びはございません。また、幼い頃から曾祖父、祖母、母より眞乗寺と相国寺とは深い関係があると、聴かされて育った私にとりましては、眞乗寺の菩提寺で御一行様をお迎えさせて頂けたことは、身に余る光栄であり、誇らしくありがたく感謝申し上げます。そして、お迎えした時は身が引き締まる想いで、いっぱいと同時に、一瞬に曾祖父や木下文堂和尚様、木下雅章和尚様の顔が脳裏を駆け巡り、想い出した途端に目頭が熱くなりました。そして、午前十時より法要が始まりました。

本尊回向、開山回向、檀家回向、般若心経等が厳肅に執り行われ、引き続き有馬頼底管長殿下の法話がなされ眞乗寺は相国寺派の中でも別格地の寺であ

る全国三ヶ寺の内の一ヶ寺であり、格式の高いお寺であることや、鹿王山眞乗寺の名称の謂れについて有馬頼底管長殿下より、ご法話の中で詳しくご紹介いただき、眞乗寺が格式の高いお寺であることを改めて知り、感激も一入でした。また殺生等のお話も賜り心が洗われ頭が下がる思いでした。人類が同じ心になれば、世界中が平和に暮らせ、戦争も無くなくと考えています。また、江上宗務総長様に於かれましては、高浜町上車持のご出身で、私の兄と同級生であり、他界した兄を思いださせて頂きました。江上宗務総長様には、和田公民館で、ご講演をご無理願ったことを心よりお礼申し上げます。今日のご挨拶の中でも、昨年晋山式での想いで話をなされた檀信徒の皆さんの笑いを誘われる等温厚で暖かい宗務総長様でありました。このたびの御親教は、眞乗寺檀家の皆さんと相国寺との深いつながりが出来たことは大きな喜びでありました。私ごとになります。曾祖父は眞乗寺檀家総代を四十有余年お勤めさせていただき、昭和二十三年の暮れには、相国寺管長大耕禅師様より、功勞として掛軸を拝受いたし家宝

としてお盆や法要事に重宝いたしております。曾祖父のような勤めは出来ませんが、檀家の皆様方と眞乗寺と相国寺をこれからも守って行かなければならないと念じます。平田檀家総代様をはじめ、各区の総代様、そして、檀家の皆様方のご協力に深く感謝申し上げますとともに、御礼申し上げます。

最後になりましたが、本山相国寺ご一行の皆様、相国寺派各寺院ご住職様方に感謝申し上げます。次第で御座います。今後皆様方のますますのご健勝と、ご活躍を心より、お祈り申し上げます。

合掌

平成二十一年十月八日

御親教  
感想文

## 海蔵寺御親教について

海蔵寺総代 池田充宏

平成二十一年九月二十七日に行われました海蔵寺における御親教の日は日曜日であり、また秋の収穫も終わりこれ以上は無いほどの秋晴れに恵まれ、多くの檀徒一同がお迎えをするなか、有馬管長猥下御一行が到着されました。車を降りられ穏やかな笑顔で檀徒の出迎えに応えられる管長猥下の御姿に、それまでの緊張が霧消してしまふような大きな安心を頂くことが出来ました。厳肅な雰囲気なかで法要が始まり、読経のときには檀家一同も声を揃えて御経を読み、五十風和尚様の御指導で準備練習をした成果を充分に発揮することが出来ました。

管長猥下の法話は本堂に掲げてある先代管長の揮毫による山号額の説明から始まり、仏法の尊さや有難さに言及され、その一言一句を参拝者一同は心の奥深くまで染渡る思いで拝聴しました。続いて江上宗務総長様、佐分教学部長様より御挨拶を頂きました。江上宗務総長様は上車持の御生まれでもあり、幼少の頃にお父様と吹雪の中で難儀をされた折にお世話なされた方の事などを交えながらお話ながら聞いておられる様に思いました。管長猥下よりの記念品授受、江信檀徒代表の謝辞、全員での記念

撮影と滞りなく行われ、檀徒一同が深く感謝合掌しながら有馬管長猥下御一行をお見送りして無事に御親教を終了しました。

紙面には毎日のように宗教戦争の犠牲者のニュースが載っていますし、またそのような宗教観を持った人々との多文化共生社会が私たちの周囲に出来つつあります。そのような社会環境の中において私達も習俗としての仏教ではなく宗教としての仏教を学び仏教徒としての宗教観を持つ必要があると思えます。私達海蔵寺檀徒一同は今回の御親教にあたり、

その意義や自身の立場、檀徒としての矜持の持ち方等を真剣に考える機会を得ました。そうした話し合いを重ねる中でみんながよりはっきりと相国寺派海蔵寺檀徒としての意識を持つ事が出来たと思えます。御親教という貴重な経験を経て、これからも私達の生活の中で安心安寧の拠り所としてのお寺を支え守っていききたいと思えます。最後になりましたが今回の御親教に際し管長猥下はじめ本山の和尚様方やお世話いただきました教区の和尚様方に心より厚く御礼申し上げます。

御親教  
感想文

## 管長猥下御親教を拝して

正法寺総代 一瀬道夫

さわやかな秋晴れに恵まれた平成二十一年九月二十七日午後二時三十分、大本山相国寺の有馬管長猥下御一行が、私ども正法寺に来寺されました。

お車を降りられた管長猥下を始め、江上宗務総長様、佐分教学部長様、矢野教学部員様は、檀信徒一同が合掌でお迎えする中、終始にこやかに微笑まれ、穏やかに語りかけられながら、参道を進まれ本堂へと

入寺されました。しばらくご休憩された後、法要が始まり、本尊回向、開山回向、檀信徒各家先祖回向が厳肅に執り行われ、続いて管長猥下直筆の書を記念として賜りました。この書は本寺の宝として大切に致します。管長猥下のご法話は、初めに若狭の地は相国寺派にとつて大変関わりの深い所であり、歴代の偉い和尚



様方が沢山出ておられるとお聞きし、大変名誉であり誇りであります。又、世界平和についても触れられ、争いや戦争を無くすには「自我心」を無くすことが大事である。難しい事ではなく、「俺が、私が、自分こそが正しい」と言う気持ち無くす事、つまり慈悲の心を持つ事、これこそが仏様の教えであると判りやすくお話し頂き、身の引き締まる思いであります。更に日本国内だけでなく、海外でも幅広く平和活動に取り組まれているお姿に感服致しました。管長猥下下の法話は、柔らかく和やかな雰囲気を感じて語りかけられ、檀信徒は静粛に一心に拝聴させて頂きました。

また江上宗務総長様は我が正法寺の御出身であり、六十年ぶりにお帰りになるとお聞きし、檀信徒一同、心待ちにして居りました。お元気なお姿を拝見し、一同安堵致しました。お話では幼少の頃、活発で庭の銀杏の木に登って降りられなくなった事や、村の方々によく叱られたと言う思い出など、又金閣寺に入門される際の出来事をエピソードを交え、お話を頂きました。

続いて佐分教学部長様にもご丁寧なるご挨拶を頂きました。

そして、なごやかな雰囲気の中での写真撮影も終わり、その後もしばらくの間休息された管長猥下

御一行は、檀信徒一同が合掌にてお見送りする中を「ありがとう」と何度も声をかけられながら、本寺を後にされました。

夜には江上総長様をお迎えし懇親会を開催、心温まるお話を頂きました。初めてお会いする私どもにも、気軽に話して下さり、総長様の優しいお人柄に接し、「よい思い出が出来た」と皆喜んで居ります。

本日の御親教にて賜りましたご法話を念頭に入れて、兼務住職である園松寺の本田和尚様の御指導の下、日々精進をいたし、清く正しく慈悲の心を胸に生きて行かなければという思いで一杯であり、大変意義深い、何事にも変え難い一日でありました。

教区内和尚様方には、準備不行き届きの多い中、細部にわたってお世話頂きました事に、心よりお礼申し上げます。

また檀信徒の皆様にも、何かと御協力を頂きました事に対し、お礼申し上げます。

最後になりましたが、管長猥下を始め、相国寺に縁ある全ての皆様のご健康とご多幸をお祈り致しますと共に、相国寺の今後益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。本当に有難うございました。

合掌

(以下、63頁に続く)

## 釈尊の足跡を訪ねて

三

竹林寺住職 牛江宗道

### 十一 クシナーラー

クシナーラーは、釈尊が入滅された、つまりお亡くなりになった地であり、四大仏蹟の一つに数えられています。この地は、クシナガラ(拘尸那揭羅)とも、クシナガリー(詩的、優雅な美称)とも、将又クシナーガル(現在、インドでの公称)とも呼ばれています。私は、敢えてパリ語読みのクシナーラーと呼ばせて頂きます。

釈尊は、八十歳になられたとき、王舎城の靈鷲山から、アーナンダ(阿難尊者)等多くの修行僧たちとともに、最後の巡教の旅へと出発されました。釈尊は、種々の教えを説きながら、王

舎城から北へ、ナーランダ、パトナへと歩み、ガンジス河を渡って北西へ、ヴァイシャーリー、パーヴァー、臨終の地クシナーラーに至ります。そして、クシナーラーの二本の沙羅双樹の間に、身を横たえてお亡くなりになりました。

「そのときの沙羅双樹が、時ならぬのに花が咲き、満開となった」と、『大パリニツパーナ経』には書かれています。(『ブツダ最後の旅』岩波文庫 百二六頁)

さて、十二月十一日(第六日目)午前七時半、起床。今朝は起床時間が遅く、ゆっくりとさせて頂きました。同九時、さっそく私達は、バスで釈尊の般涅槃(入滅)の地を参拝に出掛けました。

現在、この地は、白亜の涅槃堂とストウパー(仏塔)のふたつの建物を中心にした遺跡公園となっています。園内には、大きな沙羅の樹が何本か植えられています。



沙羅の樹

涅槃堂の中には、全長六・一メートルの巨大な金色に輝く涅槃像が、頭北面西右脇臥すほくめんさいうきようがの形で眠っています。堂内で私達は、全員で般若心経を誦読しました。読経中、釈尊の深恩を感じて、涙が込み上げて来たことを今でも覚えています。帰るとき、園内に落ちていた沙羅樹の葉数



金色の涅槃像(全長6.1m)

枚を旅の記念に拾って、釈尊にお別れました。

次に私達は、再びバスに乗って、釈尊の遺体が荼毘にふされた所、ラマバル塚にお参りしました。ここでも私達は、献香して般若心経を唱え、釈尊に回向しました。塚の横には、ヒラニヤヴァティー河と思われる川が流れていましたが、乾季のためか水は枯れていました。



白亜の涅槃堂

午前十時半、私達はホテルに帰り昼食を頂いたあと、午後〇時半、次の目的地、ネパールの釈尊の生誕地ルンビニーへと向けて出発しました。



ラマバル塚

## 十二 サガールハワー

私達は、昨夜バスで国境を越えて、インドからネパールに入国しましたが、ネパールの道路の両側には街灯があつて白色の光が輝いているのを見て、私は驚きました。インドの道路には、電灯はまったくありません。ネパールはインドに比べて少し豊かな国のように思われました。

十二月十二日(第七日目)、午前七時、私達は、ルンビニー園のすぐ前にある宿、ホテル・ルンビニー・ガーデン・ニュー・クリスタルをバスで出発して、釈迦族滅亡の地サガールハワーを訪ねました。

この地で釈迦族は、コーサラ国の王ヴィルダカ(毘瑠璃)王によって殲滅せんめつさせられたと言われています。ヴィルダカ王の父、プラセーナジツト(波斯匿)王は、自らの后きさきを釈迦族に所望したところ、釈迦族は美しい婢こわいを釈迦族の娘だと偽つて、プラセーナジツト王に后としてさし出しました。プラセーナジツト王とこの后(名を末利まろという)との間に生まれた子が、ヴィルダカであります。

ヴァルダカは、八才のとき、母の故郷釈迦族の住むカピラ城に行ったとき、釈迦族の人々から、「お前は奴隷の子だ」とののしられて、耐え難い恥辱を受けます。後年、国王となったヴィルダカ王は、この恨みを晴らすべく、釈迦族を虐殺したという次第であります。

サガールハワーには、小さな沼がありました。釈迦族が皆殺しにされたとき、この沼はその血で真赤に染まったと言われています。

## 十三 ティラウラコット(カピラ城址)

次に私達は、サガールハワーからバスで十分くらいのところにあるティラウラコットに行きました。ここは、釈尊が二十九才で出家するまで住まわれていたお城、カピラ城があつた所です。ルンビニーの西北二十四料キルヤムの位置にあります。また、カピラ城址は、インドのピプラーワリーにもあり、どちらが本当のカピラ城址か今の



サガールハワーの沼



ティラウラコット遺跡(推定カピラ城址)

ところ決定されていません。

ともかく、ティラウラコットのカピラ城址は、現在人気のない静かな森の中にありました。釈尊在世当時、カピラ城は人口約百万を誇っていたと言われていますが、ヴィルターダカ王によって、完全に破壊させられて廃墟と化したわけであります。

私達は、カピラ城址の西門跡の脇から、中に入り朝の爽やかな空気を感じつつ、ゆっくりと東門跡に向かって歩きました。そして、東門跡のレンガの上で、一炷坐禅瞑想して往時の釈尊を偲んだあと帰りました。

#### 十四 ルンビニー

ティラウラコットから次に、私達は、釈尊生誕の地ルンビニー(四大聖地のひとつ)を参拝しました。釈尊は、カピラ城主シユットドーダナ王(浄飯王)とマーヤー(摩耶)夫人との間にお生まれになりました。時に、紀元前四六三年四月八日



マーヤー夫人堂(手前が池、左奥にアショーカ王の記念柱)



ルンビニー園の入口

(諸説あり)であつたと言われております。

マーヤー夫人は、釈尊出産のために、カピラ城から実家のあるラーマ村に帰る途次、ルンビニーの花園で、釈尊を

お生みになりました。マーヤー夫人は、ルンビニー園の中にある池で沐浴して、岸に上がられて近くにあったアショーカ樹の枝に咲いている花を摘もうとしたとき、右脇から釈尊をお生みになつたと伝えられています。アショーカ樹は、無憂樹とも無憂華樹とも言いますが、釈尊の出産が安産であったことから、憂うることのない(華)樹と呼ばれるようになりました。しかし、マーヤー夫人は、釈尊の出産後、七日目にお亡くな



マーヤー夫人堂の内部

りになります。釈尊は、この母の死に直面して、「人間は何故死ななければならないのか。」「人間はどうして生きなければならないのか。」という人間と人生の根源を問い求めるようになられたと、私は考えています。

さて、私達は、ルンビニー公園の入口の前でバスを降りて、ここからマヤー夫人堂に向かって歩きました。マヤー夫人堂までは、広い道が通じていて、道の両側には赤や黄色のきれいな花が咲いていました。二つ目の門を入ると、赤色の大きなマヤー夫人堂が見えて来ます。お



マヤー夫人像

堂の周囲には、マヤー夫人が沐浴されたであろうと思われる池とアシヨーカー王の建立した記念柱があります。お堂の中に入ると、発掘された寺院跡や釈尊をお生みになったときのマヤー夫人像やその像のすぐ下に、釈尊生誕の地を示す、ガラスケースに入れられた釈尊の小さな足跡を刻んだ石が見られました。

私は、園内の売店で、ルンビニー園の絵葉書とマヤー夫人堂のポスターなどを記念に買って帰りました。

## 十五 ラーマグラーマ

私達は、昼食のために、ルンビニー園から歩いてホテルに戻り、昼食後、マヤー夫人の故郷ラーマ村(ラーマグラーマ)を訪ねました。

私達は、午後一時半、ホテルをバスで出発して夕方四時頃ラーマグラーマに着きました。それ故、ラーマ村は、ルンビニーから結構遠くにあるように感じました。

マヤー夫人は、コーリヤ族の出身で、デーヴァダハ城のスヴーティ王(善覚王)の娘として、このラーマ村でお生まれになったと言われています。デーヴァダハ城とマヤー夫人が嫁がれたカピラ城とは隣り合っていたと言っています。

ラーマ村には、釈尊のお墓があります。釈尊の遺骨は、八か所に分骨埋葬されました。後年、アシヨーカー王は、このラーマ村のお墓を除いて、他の七か所のお墓(仏舍利塔)を開いて、仏舍利(遺骨)をもっと細かく分けて、全インドに八万四千の、仏舍利を祭った塔を建立したと言われています。ラーマ村のお墓は、アシヨーカー王の発掘を池の龍王が阻止したので残っていると伝えられています。

私達は、ラーマ村の一角にバスを止め、そこから釈尊のお墓(墳墓)を目差して歩き出しました。すると、いつのまにやら、どこからともなく、たくさんネパールの子供たちが現われて、ぞろぞろと私達のあとからついて来ました。途中に池もあり、また黒牛がのんびりと草を食べ



釈尊のお墓の前で(三十五名全員)



ピプラーワー遺跡(推定カピラ城址)



睡蓮の咲き誇る池

睡蓮が咲き誇っている池があり、その辺で一炷ぼとりの坐禅をした後、次の目的地シユラーヴァステイ  
ーへと向かいました。

## 十六 ピプラーワー(カピラ城址)

十二月十三日(第八日目)。午前八時、私達は、ネパールのルンビニーを出発して、再び国境を越え



のんびりと草を食べる黒牛たち



ひとつこいネパールの子供たち

ていました。釈尊のお墓に着くと、私達は、大きな声で読経礼拝し、坐禅をして、またゆっくりとバスの止っている所に戻りました。

て、インドのピプラーワー遺跡を目差しました。

ピプラーワーは、釈尊が二十九才で出家するまで生活されていたお城、カピラ城があったと推定されている、インド側の遺跡であります。この遺跡から、一八九九年、ウィリアム・ベツペによって、釈尊の遺骨を納めた舍利壺(骨壺)が発見されています。釈尊の遺骨は、八つに分配されて、それぞれ仏塔を建てて供養し祭られました。その遺骨のひとつが、カピラ城の釈迦族にも与えられました。それがピプラーワーから発見されたので、ここがカピラ城址と推定されているわけでありませう。

現在、この舍利壺は、デリーの国立博物館に展示されております。

私達は、国境を越えバスに揺られて、ピプラーワーに着きました。ネパールは涼しかったのですが、インドに入ると、気候が少し暑くなったことに気づきました。私達は、ピプラーワー遺跡の中に入って、いつものように読経礼拝し釈尊に回向致しました。また、赤紫色の美しい

## 十七 シュラーヴァステイー(舍衛城)

シュラーヴァステイー(サンスクリット語Śrāvastī)は、舍衛城とも言い、釈尊在世当時、古代インド十六大国の一つのコーサラ国の首都でありました。コーサラ国は、マガダ国と覇権を争う程の強国でしたが、ヴェルードカ王のとき、マガダ国によって滅ぼされています。

また、舍衛城の南の郊外には、平家物語で有名な祇園精舎がありました。祇園精舎は、スタッタ(須達)長者が、ジエータ(祇陀)太子の園林を買い取って、釈尊と修行僧たちのために建てたお寺であります。スタッタ長者は、貧しい孤独な人々によく食を施したので、アナータピンダダ(給孤独)とも呼ばれました。それで、祇園精舎



祇園精舎戒壇跡

は、二人の名を入れて、祇樹給孤独園とも呼ばれ、金剛経等多くの経典が説かれた舞台になっております。

十二月十四日(第九日目)、午前五時半、起床。私達は、朝食を済ませて、午前七時、祇園精舎跡を参拝に行きました。私達は、門から中に入り、朝日の光に輝く祇園精舎跡をゆっくりと散策しました。園内には澄みきった空気が漲っていました。私達は、園中央部にある戒壇跡で、全員で厳やかに般若心経を唱え釈尊に回向致しました。次に、バスに乗ってすぐ近くにある舍衛城跡を見学に行きました。ここでは、釈尊に教化された、かの殺人鬼アングリマール(指鬘外道)の住居跡を見ることができました。しかし、舍衛城跡は、まだ発掘が進まず、これから開発整備されていく遺跡であるように思えました。

午前九時半、私達は、一旦ホテルに戻って休息し、同十時半、昼食を頂いたあと、同十一時十五分、デリーに帰るべく、ラクナウ空港へとバスで出発しました。



舍衛城アングリマール住居跡



祇園精舎跡

## 十八 デリリー

十二月十五日(第十日目)。本日が、インド・ネパールの旅の最終日となりました。午前八時半、私達は、バスでデリー市内観光に出発しました。まず、デリーの象徴インド門を訪ねました。この高さ四十二メートルのインド門は、第一次世界大戦で戦死したインド兵士の慰霊碑でありました。壁面にはたくさんの方の亡くなった兵士の名が刻まれていました。次に私達は、国立博物館を見学に参りました。ピプラーワーから出土した釈尊の舍利壺が、厚いガラスケースの中に展示されていました。この前で私達は合掌礼拝したあと、各人別れて館内を見学しました。ヒンズーの神々の像やガンダーラ出土の仏像や細密画等々が、たくさん展示されていて、十二分に堪能させて頂きました。

このあと、私達は、日本料理店「たむら」で、日本大使館一等書記官であられる豊福さんご夫妻をお迎えして、いっしょに楽しく昼食を頂きま

した。そして、午後からは、ムガル帝国時代の都オールドデリーを人力車で二人一組になって観光しました。



デリーの町・オールドデリー



高さ42mのインド門

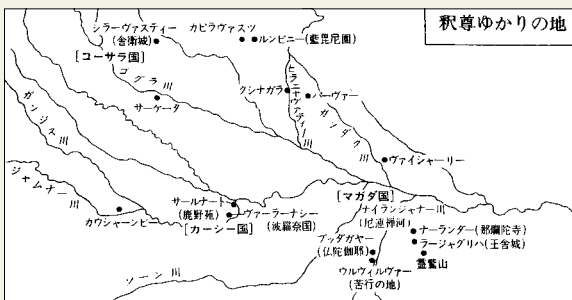


この旅で私は、釈尊の四大聖地(初転法輪の地 サールナート・成道の地ブツダガヤー・涅槃の地 クシナーラー・生誕の地ルンビニー)はもとより、前正覚山、ナイランジャナー河(尼連禪河)、スジャーター村、ナーランダ、竹林精舎跡、ラージギール(王舎城)、霊鷲山、ヴァイシャリー、釈迦族滅亡の地サガルハワー、ネパール側のカピラ城址ティラウラコット、釈尊の母マヤー夫人の故郷ラーマグラーマ、インド側のカピラ城址ピブラーワー、祇園精舎跡、そして舎衛城(シユラーヴァステイー)跡など数多くの釈尊ゆかりの地を巡拝することができました。

青森県生まれの板画家 棟方志功氏は、昭和四十七年初めてインドを訪ねたとき、「インドは大きくて、もうとても重くて、濃くて、広くて、どうにもならない国だよ。」と、その印象を述べています。私達の巡拝したインドは、現在でも、電気もトイレもガスも水道もないところでしたが、広い大地に赤く美しく沈む太陽がありました。インドは、本当に、「大きくて、重くて、濃

くて、そしてどうともならない」宗教大国であると感じました。

最後に、私は、この紀行文を書くにあたって、松原哲明師の『ブツダの生涯とそのおしえ』、三宝会の後藤一敏氏の『インド・ネパール仏教遺跡巡拝の旅―旅行記―』、そして現代禅研究会の禅僧の方々の、この旅のために下調べした資料等大いに参考にさせて頂きました。私の言葉になり切っていない所は、何卒ひらにご寛恕の程宜しくお願ひ申し上げます。拙文の獲麟において、釈尊ゆかりの地の地図を、『岩波仏教辞典第二版』より転載させて頂きます。



御親教  
感想文

## 蔵身寺御親教を拝して

蔵身寺総代 大下裕義

(46頁からの続き)

米の収穫作業も一通り終えた爽秋の蔵身寺に有馬頼底管長猥下御一行をお迎えし、開教できたことを心より有難く感じるとともに無事お迎えすることができたことに安堵しています。

昭和六十年より無住の寺となりながらも、檀信徒の抛り所となるよう当番で毎月一日と十五日には掃除や献花、盆前には村総仕事で裏山の草刈など維持管理に努めています。

しかし、住職が日課とされたお勤めの鐘や木魚の音は村の中に響かず、和尚からの法話も限られた機会でした。会ではか何うことはありませんでした。

今回の御親教は六十余年振りのことで、お迎えするにあたり、手入れすることのできなかった朽ちた床板の大工仕事や畳の入替え、庭の剪定、枯れた大木の撤去、村の中を流れる子生川の土手の念入りな草刈など万全とはいえないながらも数々の準備を経てその日を迎えることができました。これも、檀信徒一同の寺に対する想いの賜物です。

当寺は子生(こび)の里にあり「ありがたや 朝日輝く蔵身寺 流れも清き 牧山の水」と詠まれています。

す。寺は牧山に寄り添うよう建てられ夜には満天の星が輝き、あたかも北斗星を拝する様にたたずんでいます。

有馬管長猥下は、法話としてこの北斗山蔵身寺に纏わる話をされました。禅語の極意として『北斗裏に身を蔵す』とはどのような事かとの暗示。「北斗星に身を蔵すことはできるのか?」これは常識を超えた非常識で考えることが大切であり、北斗星に身を蔵すことはできないと思うと常識になる。世の中には非常識が多くあり、当たり前でないことを実現するのは、人間としての精神世界では可能であるとのこと。

『般若心経』でも同様で、「空」「無」の様に心の中を空っぽにし、いやな事、悲しみ、うれしい事など様々な煩惱を取り除くことは、精神世界の中で可能になると説かれました。禅語として「無一物中無尽蔵 花有り月有り楼台有り」(心中一物も無き自己は宇宙の本源に透り、森羅万象ごとく自己ならざるものない)との言葉があるが、常識を超えた非常識の思考は「北斗裏に身を蔵す」と同じであり、

人間の英知にあつてはできることであるとお話しました。

日々の会社・家庭・地域での生活の中で、ややもすると忙殺され自分をどこかに置忘れてしまいがちな中で、この法話は自分自身に問いかける良い機会になりました。

法話を聴き、改めて蔵身寺の寺号に込められた禅の心の一端に触れることができました。そして、わ

が蔵身寺を檀信徒一人一人の心の修行の空間として守り後世に伝えていくべきと心に刻むことができました。

このたびの御親教では、末寺のことまで想いを寄せていただいている有馬頼底猥下下の温かい御心により近く触れさせていただきました。

深く感謝申し上げます。有り難うございました。

合掌

御親教  
感想文

## 正善寺御親教に思う

正善寺総代 松本規司夫

九月二十八日は、彼岸花が野路に咲き風は絹を引くごとく優しく体を包む感の素晴らしい秋の一日となりました。

先に佐分教学部長様、矢野教学部員様をお迎えした後、百人近い檀信徒が見守る中、大傘を伴い山門より有馬頼底管長猥下、江上宗務総長様をお迎えました。

管長猥下大導師の下、法要を頂きその後大拍手の

中記念品を頂きました。寺宝として後世に伝えてまいります。

管長猥下の御法話に、当寺の御本尊、十一面観世音菩薩様は、十二面広く全ての人をお救い下さる有り難い仏様で有ること等、笑顔を交えてお話されるお姿に一同深く心に染みりました。

江上宗務総長様は、ご出身が高浜町上車持と言うことで少年時代の正善寺との思い出をお話下さいま

した。

佐分教学部長様は「円明」の編集、研修会等を担当されておられる事、当寺の境内整備についてお話をしました。

記念写真撮影後に、管長猥下ご一行様御臨席の下、六斎念佛を奉納致しました。

今は町無形文化財ですが、先人の苦勞により京都より伝えられたものです。

当時は歩き旅で、名田庄を越えて周山街道の鶴ヶ岡で旅の足を休め、春には京北町の常照皇寺の九重桜に勇気を頂いて、秋深まれば高尾の紅葉に心を癒されて京都の寺院参拝をしたと聞いております。

管長猥下ご一行様の前で檀信徒の方々ご先祖様のお墓に囲まれて、鐘の音と太鼓の響きに合わせてかけ声高く振り舞う姿をご披露させて頂きました事は、生涯忘れることのない喜びと感謝でいっぱいあります。

有馬管長猥下、江上宗務総長様、佐分教学部長様、矢野教学部員様御親教誠に有り難う御座いました。住職始め檀信徒一同心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、管長猥下ご一同様がご健勝でご活躍されます様心よりお祈り申し上げます。

檀信徒一同 合掌

御親教  
感想文

## 管長猥下御親教回顧

南陽寺総代 窪田蒸吉

曇りがちの空模様も雨の心配はなさそうである。横町通りから山門、そして本堂入り口まで、檀信徒一同が両側に御待ちする。先導車が着き随行の和尚様方がお着きになり、間を置き『有馬管長様』のご到着である。檀信徒一同ご近所ご家族の皆様は両

手を合わせおもむろに頭を下げお迎えをする。

有馬管長は大傘の下より笑みさえ浮かべて真にこやかに一人一人に会釈され入門される。茶禮、休息のとき、管長様はふと「故桂寛」氏への叙勲の額に眼を移され、『早く亡くなられた、是からの僧だった

のに、今日は寛洲和尚禅師の供養のお経を唱えさせて頂く」と申されたその時思わず目頭が熱くなりました。

間を置いて鐘が響く。案内僧のお役にて管長様が正座につかれ、江上宗務総長様、教学部長様、各僧侶様も所定の座におつきになる。本堂は檀信徒でいっぱいになっている。潮音山南陽寺檀家先祖代々供養をはじめ、混迷する人々、混乱する世相の安寧を祈願しての回向読経は正に南陽寺本堂内外に響きわたり、私共檀信徒の日々の生活が安定して、お互い人としての道を歩めるようお祈り頂いたものと思ひ、自身身の引き締まる感がし、あらためてますます精進を重ね、先祖代々供養の心を尚一層持ち続けたいと思ひました。

続いて故「桂寛洲和尚大禅師」への回向読経。信徒の喜びはひとしおであった。御親教が始まると、皆んな静まり咳払いが所々です。管長は満面笑顔といったほうが解り易いお顔で、「今日は有難う懐かしい思ひ出がいっぱいある所へ来られて」と始まり、「若い頃海水浴にきてお客がいっぱい今皆さんが座っているところで、雑魚寝をしたことを思ひ出して」と言いながら微笑まれた。そして「私は若い頃、実は九州から京都へ来ました。寛洲和尚とは一緒の修行時代で、物の無い時代だからなおさら懐かしい」

繁忙の所ご光来賜り誠に有り難く、厚く御礼申し上げます。次第でございます。

尚又、第四教区支所長様を始め関係住職様方誠に有難う御座いました。南陽寺住職、園松寺本田真人住職には細部に亘る準備、御指導に対し、衷心より御礼申しあげます。不行き届きが多々ありました所は何卒ご容赦をお願い致します。寺院婦人、役員、

平成二十一年九月頃、本山相国寺の御親教がありますと、和尚様からお話がありました。

今年に入り檀信徒、役員一同、境内・寺内の清掃等何かとお迎えの準備を進めて参りました。当寺開創以来初めての事で、檀信徒の心は不安と期待でいっぱいでした。

九月二十九日、御親教の当日は前日からの雨が残り案ずるなかでの開始となりました。予定通り午前十時頃、兼務和尚様・役員の出迎える参道に有馬管長様が到着されました。管長様はにこやかな笑顔

と昔話して始まりでした。仏教の講話でないため座は笑顔がしばらく続きました。そしてお顔は変わり、中国やアジアの各佛寺参詣と佛教と各国の世状、特に平和な生活と、平和な国づくりは、人間究極の目的であるとおっしゃいました。御親教は佳境に入り、いつまでも平和な心を持ち続け、平和な世界でありたいと改めて思いました。

江上総長様、教学部長様のお話は、常に御佛にお仕えされて居られる日々のお姿がよく判りやすく温もりを感じさせられました。

謝辞の時、亡き寛洲和尚の事を思ひ出したら急に悲しくなりました。…思ひ返せば二年前…『今度、御親教があつて管長さんが来られるんやで、役員さんみんなも頼むで』と嬉しそうに言われていました。一番期待されてこの日を待ち望んで居られていた寛洲和尚の事を思ひ出したとき、恥ずかしくも声が詰まってしまいました。残念だったろうと今尚つくづく思ひます。

管長様以下本山和尚様方は茶禮、休息されている間に写真撮影の準備ができ、天候は上々、管長様を中心に撮影が出来ました、良き記念、良き思ひ出となりました。

終わりに臨み、この度の『管長様下御親教』催行にあたり、管長様を始め本山関係者の方々には遠路御

檀信徒一同の皆さん、今後とも南陽寺護持運営に尚一層のご協力をお願い致します。最後になりましたが、是を契機に本山相国寺と、私共先祖代々菩提寺を守護する末寺との交誼興隆が円滑に参ります様、伏してお願ひ申しあげまして御礼と致します。有難う御座いました。

合掌

御親教  
感想文

## 妙祐寺御親教に思う

妙祐寺総代 松本詔三

で親しく会釈され、檀信徒一同は合掌でお迎えしました。

しばらく休憩、茶礼の後法要が始まり、本尊様御回向、開山様御回向、檀信徒各家先祖御回向が厳粛に執り行われ、引き続き管長様の御法話を頂きました。檀信徒一同、有難く拝聴致しました。

臨済宗は中国で始まり、禅宗の修行は特に厳しい事、仏教は多神教であり何事も心を広く受け止める教えである事、子供の教育に対する親のつとめの事、本尊薬師如来様は人の体のみならず心の病も治す

仏様であるとお教え頂きました。

仏教に対する信仰心を強く持たねばと自戒する次第です。又、古い寺ではあるが良く手入れされているとお言葉を頂き、檀信徒一同報われた気持ちになりました。

管長様に続き、江上宗務総長様、佐分教学部長様よりご挨拶を頂きました。江上宗務総長様は高浜町上車持のお生まれとお聞きしておりましたので懐かしきことも思い出されたことと思います。管長様より記念品を頂き有り難う御座いました。当寺の貴重品として後世に伝えてまいります。

最後に、記念写真を本堂前にて管長様を囲むように撮りました。檀信徒にとりまして生涯忘れるこ

とが出来ない思い出となることでしょう。又境内の毘沙門堂にも足を運んでお経を頂き有り難う御座いました。

お見送り時には朝からの小雨も止み、檀信徒一同は参道に並び合掌にてお見送りしました。

最後に有馬管長様、本山から御同行された皆様、御健勝と御多幸を心よりお祈り申し上げます。教区各寺院の和尚様方には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。ありがとうございます。

今後、檀信徒一同益々精進し御仏を敬い歩んでゆかなければと思います。

合掌

御親教  
感想文

## 管長猥下御親教を拝して

元興寺総代 隅田啓三良

午前中の雨で境内はすっかり洗い清められすがすがしい雨上りの中、管長猥下は当山にご到着されました。待ちに待ったこの日を迎え、檀信徒一同、喜びと感激をもってお待ちいたしておりました。

管長猥下のにこやかで柔和、気負いなく自然、大きくて威厳のある御姿に我を忘れ合掌しお迎えさせていただきました。

当山御本尊様檀信徒御祖先様への御回向をいた

き、又相国寺のいろいろな成り立ちや歴史の貴重な御法話を拝聴させていただきました。

この度の御親教で管長猥下のお姿に間近に接し、親しくお言葉をいただきましたことは檀信徒にとりまして一生忘れることの出来ない貴重なすばらしい思い出となりました。

書物等を拝見させていただきましたと、管長猥下には八歳の頃より日田市岳林寺をかわきりに厳しい修行と試練を重ねられ、仏道を極め続けてこられました。この厳しい修行と心の修練の積み重ねが今の管長猥下のお姿をつくり上げられたものと思います。行く先々で接する人達の心を救うお姿になられた

のだと感じさせていただきました。今回の御親教で管長猥下の御慈愛あふれるお姿に身近で接しさせていただき、側にいる私達は何ともいえない温かい、やさしい、和やかな気持ちにさせていただくことが出来ました。心より感謝いたしております。

今後管長猥下の御苦労と御慈悲に報いる為にも、和尚様を中心に檀信徒を始め地域の皆様のお幸せの為微力ではありますが精進努力をさせていただきますと思っております。今後とも御指導御鞭撻いただきます様よろしくお願い申し上げます。

管長猥下にはくれぐれもお体をご自愛いただき益々の御活躍をお祈りいたしております。

御親教  
感想文

## 園松寺御親教を拝して

園松寺総代 時岡昭浩

第四教区御親教が三年間に渡り行われ、その最終日の九月二十九日、当寺に有馬管長猥下、江上宗務総長様、佐分教学部長様、矢野教学部員様のご一行をお迎えできたことを、檀信徒一同心より嬉しく思うと共に、遠方よりお越しいただき心からお礼申し上げ

げます。  
当寺檀中より、相国寺管長一一五世の維明周奎禪師（一七三二～一八〇八）、一二二世の橘州周俣禪師（一七九三～一八六四）をはじめ多数の高僧を輩出するなど、比較的關係が深い寺院であると私自身

# 「演劇という道」

演劇塾 長田学舎 梶田明子

思っておりましたが、管長猥下の法話の中にも相国寺との係わりが紹介され、一同大変感激いたしました。管長猥下も終始柔和な笑顔でお話をされ、また江上宗務総長様も当町の出身であることなど、檀信徒一同一層の親しみを覚え、本山を身近に感じる有意義な時間を共有させていただくことができたと思います。

今後檀信徒一同益々精進し、住職と力を合わせ、園松寺を守っていかねばならないと心に刻みま

した。

来年はこの御親教は第五教区の島根県で行われるとお聞きしています。管長猥下はじめご一同様にはご健康で無事御親教を終えられますよう、心から祈り申し上げます。

最後になりましたが、この度の御親教に際し管長猥下はじめ、第四教区宗務支所長様、教区の各寺院の住職様には大変お世話になり、厚くお礼申し上げます。

## 平成二十一年度 在錫者名簿(雪安居)

愛知(妙)	福昌寺 <small>檀徒</small>	羽澄一乗	兵庫(妙)	靈雲寺 <small>檀徒</small>	林明慶
鹿児島(相)	良福寺 <small>檀徒</small>	近藤永進	香川(東)	正楽寺 <small>檀徒</small>	上杉正航
福岡(東)	莊嚴寺 <small>檀徒</small>	山崎承宗	京都(相)	光源院 <small>檀徒</small>	荒木文元
京都(南)	光雲寺 <small>檀徒</small>	中川秀峰	福岡(大)	禅寿寺 <small>檀徒</small>	津田宗山
栃木(叢)	願成寺 <small>檀徒</small>	長尾徳宏			

今年も早いもので、もう師走——。毎年年末は、仕事があれば帰省して故郷で新年を迎えます。大晦日には家族でお年越しそばを食べ、テレビを観ながら家族と話し、御節料理を作る母を手伝ったりするのですが、それがとても嬉しく、有り難いことだと思ふのです。そしてお正月の間は、ほんの数日間ですが、普段の一人暮らしとはまったく違う、家族そろっての生活をするようになります。

一人暮らしは、本当に気楽なものです。好きな時に好きなものを食べ、また食べずにすましてしまっても、誰も何も言いません。夜通し起きていても、また一日寝ていても、気兼ねすることはありません。

しかし家族といると、そうはいきません。実家では、怠惰な生活が嫌いな父に合わせ、休日であっても早起きをします。たとえ食欲がなくても、家族の食事の時間にあわせなくてはなりません。料理の味付け一つにしても、一人の時は多少不味くとも気にならないのですが、家族が食べるとなると、この味は濃いだろうか薄いだろうかと考えて、何度も味見をしてみます。こういう生活が二、三日も続くと、家族との生活の居心地の良さはあるのですが、やっぱり一人暮らし



しが良いなと思ってしまう——。この間まで、久しく会っていなかった家族との再会を楽しみにしていたのに——。ほんとうに勝手なものです。こんな私ですから、日常生活でも、無意識に我が身のこと優先されてしまって、後から反省したり後悔したりすることが、数多くあります。

以前、弟と叔母と三人でテレビを見ていた時のこと、叔母がうたた寝を始めました。私はかまわずテレビに見入っていましたが、弟は叔母を気遣って「音を小さくしなきゃ」と私に注意したのです。当時弟はまだ小学生でした。六歳も離れた弟が、叔母のことをちゃんと気遣えるのに、自分は全く気づきませんでした。穴があつたら入りたい心境になったことを憶えています。

こんな情けない体験は、数え上げればキリがありません。皆が暑い中まだ作業をしているのに、自分一人だけ先にお茶を飲んでしまったり、すぐ隣で祖母が寒がっているのに、自分だけ平然と上着を着ていたり……。地方公演の時、そこは一つの控え室を男女で共同使用していましたが、男性は私たちを気遣って、廊下の暗がりでは替えてくれました。公演が終わり、ほっとして替えている

と、先輩のOさんが「男性のために早く着替えてあげなきゃ」と言われたのです。私は公演が終わった安心感だけで、男性のことなど頭からとんでしまっていました。Oさんは先輩とはいえ、私より二つも年下です。そのOさんが気がつくことが、私には出来ないのです。

演劇は、人間生活の再現であり、その中で俳優は、自分とは別の人物の生活を生きなくてはなりません。それだけに、個人の生活の中で他者の心の動きに無頓着では、とても務まりません。自分がどれだけ無になって、他者を思いやることができるか、日頃の細やかな気遣いに、どれだけ気がつくことが出来るか、何事も他人事ではなく全て我が事として受け入れられるか、それが俳優にとって重要だと考えています。しかしその重要なことが、私には欠けているのです。それに演劇は、共同作業がつきものです。何をやるにしても、必ず誰かの協力が必要になります。常に他の人と関わり、協力し、共同で目的を達成しなくてはならないのです。しかしそういう、人とコミュニケーションをすることも、私は苦手です。自分に演劇などやる資格はない、何故自分に向かない演劇を続けているのかと悩んだ時期もありました。

数年前、いただいた役の人物を掘り下げる勉強のため、坐禅の体験談を読みました。それは「臘八撰心」という、坐禅修行の体験談です。「臘八撰心」とは、お釈迦様が六年にわたる修行の後、悟りを開かれた十二月八日（臘月へ十二月へ八日↓臘八）を記念して、禅寺で十二月一日から八日の夜明けまで、お釈迦様の悟りを開かれた心を自分のものとするため坐禅に打ち込む、坐禅修行のことだそうです。

です。

寒さの厳しい十二月の一週間、朝から晩まで坐禅をして過ごすなど、私にはとても考えられないことです。朝から晩まで集団生活、集団行動で、一日中僧堂に座り続け、寒さと足の痛さに耐えながら、食事量、食べる量、食べる早さも皆一



緒でなくてはなりません。それを読んだ時、これは自分には絶対無理だと思いました。自分なら病気になるってしまふ、坐禅をやるうという人の気が知れないと思います。

体験談を書かれた女性も、最初は辛さを語っておられました。寒くて、坐禅を組む足の痛さで夜も眠れず、全身の痛みと辛さに涙を流しながら坐禅を続けられたそうです。しかし、その最終日、突然痛みがなくなり、まるで自分自身が透き通ったようで、ベールがはがれたように周囲のことがはっきりと見える感覚になったそうです。身体が内側からぼかぼかと暖かく、座りづめで動いていないにも関わらず、空腹を覚え、今まではその量の多さとスピードの速さに、ついて行くのが精一杯だった食事も、いつのまにかちゃんと美味しく、楽しんで食べられるようになっていたそうです。

素晴らしい体験だと感動しました。そして私もそんな気持ちになりたいと思いました。しかし、そうなるためには、いやでも、苦しくても、泣きたくても、逃げ出したくても続けてやり遂げなくてはならないのです。それは坐禅だけでなく、どの世界でも同じなのだ。――

私も頑張らなくてはと思ったのです。

それから数年―― 相変わらず私は反省の毎日です。しかしこんな私でも、あきらめず続けている事で、ほんの少しずつですが、前進しているのかなと思う事があります。前述の女性のような思い迄は程遠いのですが、私の歩む道である演劇で、そんな瞬間を迎えられる時に近づけるよう、今年も一歩一歩をしっかりと踏みしめて、努力を積み重ねてゆきたいと思っております。

特別寄稿



## 現代社会のひずみを考える(慰霊祭に当たって)

第五教区 霊雲寺住職 三代政道

春の彼岸の中日。毎年地区の慰霊祭が行われる日です。国のために命を捨てて尽くされた英霊の方々に感謝をし、後に残った者達が一生懸命生きて、国を、地区を、家を、守って行きますから、安心してください、という誓いをする日だと言っているでしょう。

しかし今の世の中をよく考えてみますと、決して英霊の方々に安心していただけるような社会でないことに、誰もが大きな引け目を感じるのではないのでしょうか。政治的にも経済的にも、或いは道徳的にも、治安上でも、今の世の中は不安なことだらけの現状です。日本の国を守るために命を投げ出して戦われた英霊の皆様に、ある意

味では顔向けできないような社会の状況だと言えます。

そのように考えますと、慰霊祭の今日の日、私達は各自が多方面から世の中のひずみについて反省し、将来への立て直しの決意表明をすることが是非必要だと思えます。

では、どのようなひずみが生じているのでしょうか。第一は民主主義、個人主義が、新自由主義と言葉を換え、自分だけ良ければいい、その時だけよければいいという、強い弱肉強食の利己主義、功利主義になっている点、第二は機械化、合理化が肉体労働を敬遠させ、無道徳で利那主義に陥りやすい世界を作り出してしまっているという点です。この二点が絡み合って、現代社会の諸問題



を発生させていると言っているでしょう。

私がここで強調したいのは、「進化と退化は背中合わせ」、つまり進化には強い危険性があるということです。人間の原始時代、或いはもっと下って戦国時代から現代へ、人間同士の衝突はいつも起こっています。科学の発展に伴って、今では一瞬にして人類が滅亡するような状態にまで成っています。社会の問題行動は全て進化の悪用、エゴのかたまりによるひずみと言っているという気がします。

農業が生まれ機械化が進み、農業は苦しい労働が緩和されました。ところが無責任な農薬使用が危険な食品を生み出し、健康被害を生じさせています。食品保存のための添加物や、汚染米問題も同じです。薬をしたい、金を貯めたい、自分だけよければいい、知らなければいいという使い方をします。無



知や欲が絡んで、大きな問題になってやると歯止めが掛けられます。

携帯電話はどうでしょうか。おれおれ詐欺の被害のひどさは言うまでもありません。メールにさんざん無責任な悪口を並べられ、小中高などの子供等が自殺をする事件も痛ましい限りです。顔の見えない人からの悪口雑言は、幼い子等を一気に追い込みます。普通の直接の対話では、聴く方も言う方も表情や動作がクッションになります。

インターネット、ブログ、メールなどで、子供が悪い大人に振り回されている聞サイトの問題は、もっとひどいものです。子供の売春などが、親の全く知らないところで行われています。

家の中に閉じこもって、パソコンやインターネットで株の操作をして億万長者になり、その金で会社の乗っ取りをし、微笑んで行われています。自業自得かもしれませんが、そのことから多くの人が職を失ったり、被害を受けたりするというのも、現代の代表的世相です。

都会の大手の業者が地方に進出して、その犠牲で町の商店は全滅。地方の小さな店が全部無くなって、過疎化がひどくなり、車にも乗れない老人達は、悲鳴を上げているという新聞記事。しかも国会の政治の動きかし方は、民主主義の多数決のひずみそのまますして居ます。

格差社会、過疎化、家系の断絶…。「思いやりのある日本人」という看板は全く過去のものです。

今や世界中が弱肉強食の無責任なひどい時代になっていますが、そうなることを明治時代に予測した日本人がいます。近代の我が国を代表する作家夏目漱石です。「我輩は

でいたところへとんでもない経済不況がやってきて、遂に倒産という話も良く聞きます。



猫である」「坊ちゃん」「三四郎」、晩年の「道草」、「明暗」まで、大学受験をした人達は必死に名前を覚えたものです。その彼は、創作を重ねて行く内に「近代になって日本に入ってきた西洋の個人主義は、必ず利己主義エゴイズムとなって、世の中を混乱させるであろう」という、厭世的な心境に成ってゆきます。

個人主義は義務・責任を守り、思いやりと正義の心を持っていて初めて成り立つものです。ところが人間は、欲望に負けてすぐだます、嘘を付く、弱い者いじめをし、自分勝手な理屈を並べ、他人に攻撃的になる。つまりすぐに利己主義になってしまうのです。彼は小説の中でそのことを追求し続け、最後に「自我」が正しく働くことが大切だと言うことを「則天去私」(私を去って天に則るのっと)私心を去って天を手本にせよ)という言葉であらわしています。

最近では、内山節という哲学者が同じような危険性について「他者を破壊すること、道徳として、孔子孟子の「仁、義、礼、智、信、忠、孝、悌」ということも学びました。それなのに、世の中が平和であるために絶対必要な思いやりの心の「仁」(西洋の「愛」)や、その他「礼」や「義」などは、一体どうなったのでしょうか。

過去に習ったそれらの教えは、古い意味のないことではなく、そういうものが守られてこそ、現代の新自由主義、民主主義、個人主義、機械化、合理化が本当の幸せをもたらすに違いないと思います。書店に中国のこれらの古典を分かりやすく解説した文庫本などが続々と並ぶようになったことが、それを証明しています。

そして、そういうことを理屈抜きで実行させてくれるのが、宗教です。世界中にある色々な宗教は、すべてそのように私達を正しく導いてくれるために存在していると私は信じます。

ただ、このことについて、有馬頼底管長殿下が次のように述べられております。「昔か

で発展してきた近代文明は、いずれ自己を破壊することに帰着する」と述べています。怖ろしい予測です。

ではどうしたらいいかを考えてみましょう。批判するだけではなんにもなりません。高校で漢文の時間に習ったことの中に、「性悪説」というのがありました。人間は生まれつき自分の欲望をコントロールできないところがある。道徳や宗教にたよるだけでなく、法律で強く導かれなければ、自らを破滅に追い込むという、中国の荀子らの考えです。

一見役に立たないようなことが、実は大きな役に立っているという「無用の用」ということを強調したのは荘子です。日常生活の挨拶とか、商談の際の世間話などがそうです。楽しい時間、余裕の時間があってこそ、人間は一生懸命継続して働けるし、他人のことも思いやる事が出来ると言われました。

かつて西の「バイブル」東の「論語」と言われました。我々日本人は、守るべき倫理から日本では『三教三酸』という言葉がある。仏教の釈迦と道教の老子と儒教の孔子が一緒に酸をなめる。すっぱいなあとという結論は一緒なんです。

「思いやり、愛、仁…」など教えはすべて素晴らしいが、受け止めた人々が酸っぱくして、自分にも他人にも押しつけ、悩みや争いを生じさせているのが歴史の現実だ、とも言えるのではないのでしょうか。

今日の話を、英霊の皆さんはどのように聞いていらつしやるでしょうか。「おい、頼むぞ」という声が聞こえてくるような気がします。

(一丁)

精進料理

う え  
こ っ

〒604-8326  
京都市中京区大宮通錦上ル  
電話〇七五―八二―三三七二

○臨黄總會

六月二十五日天龍寺において臨黄總會並びに布教団理事会が開催され、江上宗務総長、佐分教学部長が出席した。

○知床毘沙門堂・太子堂・観音堂法要



六月二十八日、北海道斜里町知床知布泊村において、毘沙門堂・太子堂・観音堂法要が厳修され、有馬管長、山木鹿苑寺執事長、矢野教学部長が出頭した。この法要も今年で十五周年を迎え例年以上に多くの寺院、在家のお参りがあつた。前日には記念シンポジウムとして「知床世界自然遺産フォーラム」が開催され、作家の

○相国寺墓地内供養墓落慶法要

七月二十九日相国寺墓地内において、合同供養墓落慶式が行われ管長、韜光室老大師、江上宗務総長はじめ一山が参列した。この供養墓は近年後継者不在による墓の無縁化への対策の一つでもある。



立松和平氏の司会により有馬管長、法隆寺大野玄妙管長、俳優の菅原文太氏等がパネラーとなり自然遺産を未来につなぐための意見を交換した。二十九日は早朝より知床半島の番屋まで出向き、漁師の方々と共に恒例の航海安全祈願法要を行った。

○暁天講座

八月二日、三日の二日間方丈において恒例の暁天講座が室町市政協力委員会との共催により開催された。午前五時半より六時まで坐禅、その後法話。そして大書院にて粥が振舞われ七時に解散となった。本年の講師は二日が京都ノートルダム女子大学生活福祉文化学部教授の鳥居本幸代氏による「精進料理のこころ」、三日が有馬頼底管長で「禪は世界の思想」であった。両日で延べ二百人を超える参加者があつた。



○前堂転位式

九月一日第四教区円福寺住職田中太真師の前堂転位式が挙行された。師は神戸の祥福寺僧堂(妙心寺派)で修行を積まれ、帰山されてからは前住職田中耕宗師(前四教区支所長)をよく補佐し、また地域の文化振興活動に積極的に参加された。今後の活動に大きな期待が寄せられている。



拜塔香語は左の如し。

指月山中結法縁 帰来再拜萬年筵  
祖師恩愛如何報 貴賤冤親共一烟

○臨黄合議所並布教団理事會

九月二日京都市内の東急ホテルにおいて臨黄合議所・布教団理事會、及び禪文化研究所創立四十五周年記念祝賀會が開催され、江上宗務総長、佐分教学部長が出席した。

○相国寺新能

九月十三日(日)本山庫裏玄関前で「相賀の能」という新能が上演された。これは承天閣美術館の「山口安次郎・能装束展」にちなんで開催されたもので、十月一日(木)にも上演された。(詳細、写真は、巻末カラー参照)

○秋期特別拝観開始

九月十五日(火)より本山秋期特別拝観が開始され、法堂、方丈、宣明(浴室)が一般に公開された。会期は十二月八日(火)までである。

○天龍寺晋山式

九月十九日天龍寺において同寺第二百四十五世住職・同派第十代管長、撥雲軒佐々木容道老大師の晋山式が厳修され有馬管長、小林僧堂師家、江上宗務総長はじめ一山が随喜した。相国寺と天龍寺は夢窓国師(一二七五―一三五一)を同じく開山に頂いており、両寺とも足利家ゆかりの寺である。

○第七回管長御親教

九月二十七〜二十九日、平成二十一年度管長御親教が行われた。本年は第四教区最後の年となり二十七日に眞乗寺(木下雅教住職)、海蔵寺(五十嵐祖傳兼務住職)、正法寺(本田真人兼務住職)、二十八日に蔵身寺

○相国会本部研修会

十月十四〜十五日、第二十二回相国会本部研修会が開催され、一教区二名二教区五名、三教区六名、四教区七名(引率和尚 円福寺田中太眞住職)、五教区十名の総勢で二十九名が参加した。開講式のあと江上総長の挨拶、管長祝下によるご垂示があり、その後本派五教区保寿寺閑栖藤岡大拙師より「相国寺と足利義満」という題で講演を頂いた。葉石後は大書院において江上総長より坐禅と呼吸についての法話があった。翌日は五時半起床後方丈において朝課、その後大書院で坐禅、粥座後閉講式を行った。またこの日は全員で慈照寺を特



開講式

(五十嵐祖傳兼務住職)、正善寺(頤川孝生住職)、南陽寺(本田真人兼務住職)、二十九日に妙祐寺(頤川孝生兼務住職)、元興寺(本田真人兼務住職)、園松寺(本田真人住職)の九ヶ寺を回り、江上宗務総長、佐分教学部長、矢野教学部長が同行した。(詳細は巻頭・および巻末カラー参照)

○前堂転位式

十月一日第一教区豊光寺(佐分宗順住職)徒弟佐分昭文師の前堂転位式が挙行された。師は本派僧堂で長年修行し研鑽を積まれた。第一教区も若手和尚が増え、新しい布教活動が期待される。



拝塔香語は左の如し。

一葉新涼秋色中 禅林静寂祖师風  
慈恩重大如何報 拝塔忠心古徳通

別拝観し平塚景堂同寺執事長の法話を拝聴し、最後に慈照寺のそばにある橋本関雪記念館白沙村莊を拝観、斎座懇親会後無事円成散会となった。次回研修会は平成二十三年に開催の予定である。

○日中韓三国仏教友好交流会議

十月十六〜十七日立正佼成会横浜普門館において、第十二回日中韓三国仏教友好交流会議が開催され、有馬管長、佐分教学部長、須賀鹿苑寺執事、和田鹿苑寺執事が出席した。この会は前中国仏教協会々長 故 趙樸初先生が中心となって始めたもので、以来三国の若き仏教者が国境宗派を超えて研究発表や、現代問題に対する宗教者の在り方等について発言をしている。有馬管長も過去数回にわたって記念講演を行っている。

○開山忌

開山夢窓国師の毎歳忌法要が十月二十日宿忌、二十一日半齋の両日にわたり厳修され、四教区より七十五名(寺院九名)、五教区より三十八名(寺院一名)の団参があった。二十一日九時より法堂において頼光室老大師導師のもと猷粥諷経にはじまり、諸堂焼香、奠供十八拜が行われ、引き続き檀信徒、本派寺院、天龍寺一山、各山重役、他宗派尊宿、の順に入堂し、管長祝下導師のもと出班焼香に引き続き楞嚴行導が厳修された。

管長猥下香語は左の如し。

開山忌毎歳忌香語  
照破昏衢放戒光 昏衢を照破す、戒光を放つ  
木犀前夜報恩香 木犀前夜、報恩香し  
祖翁心印三千界 祖翁の心印、三千界  
大地川河万物昂 大地川河、万物昂る  
定中昭鑑  
頼底九拜

○寺庭婦人研修会

十月二十七日～二十八日まで第二十九回寺庭婦人研修会が行われ、各教区より十四名の寺庭婦人が参加した。二十七日午後十二時半参集、一時より方丈で本尊・開山各諷経後江上宗務総長の開会の挨拶、管長猥下訓示があり記念撮影の後大書院にて全員坐禅



善峯寺掃部住職の説明を受ける



を行った。三時半からは去年に引き続き関西大学文学部原田正俊教授による「室町時代の禅宗と文化」という演題で講演があった。翌二十八日は修了式後、洛西にある天台宗善峯寺を訪れ掃部光昭住職の案内説明により、本尊十一面観音菩薩や徳川五代將軍綱吉の母桂昌院の帰依によって再建された諸堂、また当寺々宝館文殊堂を特別に拝観し、その後場所を移して齋座のあと無事に帰山散会となった。

参加者名簿

- 一教区 須賀衣代(瑞春院) 荒木寛子(光源院)
- 久山順子(慈照院) 澤万里子(林光院)
- 山木佐恵子(普廣院) 草場容子(慈雲院)
- 山木喜要子(普廣院)
- 二教区 鈴木典子(長栄寺) 小出恵子(桂徳院)
- 四教区 石崎典子(海岸寺)
- 五教区 三代典子(霊雲寺)
- 六教区 芝原由紀子(感応寺) 近藤洋子(良福寺)
- 松本三津子(光明寺)

○第二教区団参

十一月六日第六回二教区団参が行われ、二教区支所長竹林寺(牛江宗道住職) 光照寺(荒木元悦兼務住職)、長栄寺(鈴木景雲住職)、大應寺(久山弘祐住職)、是

心寺(和田賢明副住職)等の引率により四十三名が参加した。方丈で諷経後、江上宗務総長より挨拶があり、その後大書院にて同総長の法話を拝聴した。本山食堂で上幸の精進料理による昼食後、鹿苑寺を特別拝観して無事散会となった。

○東京維摩会

東京維摩会は大龍窟管長、頼光室老大師とも平成二十一年の禅会を全て終了された。来年は左記の日程で開催される。

◆二〇一〇年(平成二十二年)東京維摩会日程

管長坐禅会

- 一月十六日 二月十三日 三月二十日
- 四月十日 五月八日 六月十二日
- 七月十日 八月休会 九月四日
- 十月九日 十一月十三日 十二月十一日

以上一、三月は第三土曜、九月は第一土曜、あとは第二土曜。但し八月は休会

時間：午前十時半より正午頃迄

内容：「無門関」提唱、坐禅、茶礼

威儀・坐禅の組みやすいゆったりした服装が好ましい。

老師坐禪会

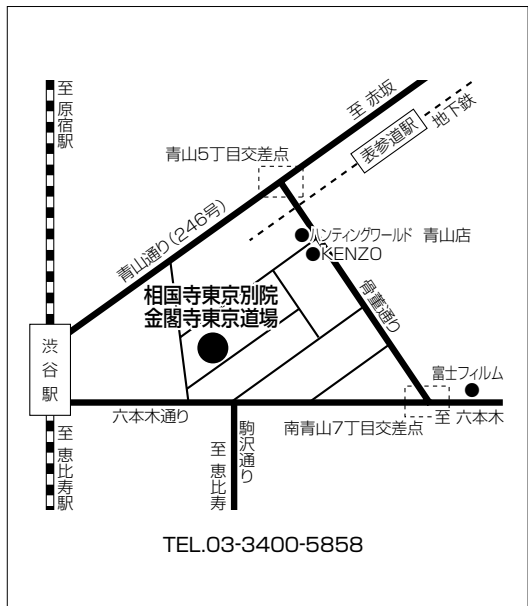
一月九日 二月二十日 三月十三日  
 四月三日 五月十五日 六月十九日  
 七月十七日 八月七日 九月十八日  
 十月十六日 十一月二十日 十二月十八日  
 以上一、三月は第二土曜、四・八月は第一土曜、  
 二、五、七、九、十二月は第三土曜

時間：午後二時より三時半迄  
 内容：「臨濟録」提唱、坐禪、茶礼  
 威儀：袴を貸与するも、足りない可能性がありますので、  
 ゆったりとした服装でお願い致します。

《お知らせ》

平成二十二年は東京別院の改修工事が予定されております。今回の円明九十三号では暫定的な日程を掲載しております。つきましては坐禅会が工場の都合で一時的に中断か仮会場で開催される場合もあります。現在のところ詳細は未定ですが相国寺のホームページなどで随時

お知らせ申し上げます。坐禅会参加ご希望の方は本山（〇七五―二三一―〇三〇一）教学部へ問い合わせ頂るか、ホームページでの日程をご確認をお願い致します。



●お詫びと訂正

本誌第九十二号 五十二頁 韜光室老大師「大通院入院傷」、一行目に「先師竹篋古風瞻 先師の竹篋、古風を瞻す」とあるのは、正しくは「先師竹篋古風騰 先師の竹篋、古風を騰す」の誤りでした。ここに訂正してお詫び申し上げます。

教区だより

第二教区

○相国会第二教区支部総会

六月二十日(土)午前十一時より、無礙光院にて、各分会の役員、顧問和尚二十七名が参加して、相国会支部総会が開催された。

平成二十年度の会計報告並びに事業報告等がされたあと、新規事業である「本山子供研修会」の企画案が提出されたが、問題点があり、再考ということになった。

総会終了後、懇親会に移って、矢尾治さんの精進料理を美味しく味わいながら、歓談して、午後二時に散会した。



無礙光院本堂

○竹林寺名月祭

十月三日(土)仲秋の名月の日、夜六時より竹林寺では、檀信徒を含めて約六十名が集って、名月祭を行なった。あいにくな天気ではあったが、それでも時々名月が雲間からその美しい姿を現わしてくれた。本堂から池に向って広さ六畳程の仮設舞台を組んで、その上まで至淵境(林哲至氏主宰)の皆様が、笙・箏・篳篥等の和楽器による演奏を奉納して下さい、祭を盛り上げてくれた。



本堂に集った人々

名月の下で、庭の虫の自然な音と雅楽がすばらしいハーモニーを作り、集った人々の心が清められた。

○二教区本山団体参拝

十一月六日(金)、第六回二教区本山団体参拝が、四十五名の相国会員が参加して行われた。

午前十時半より、本山大方丈にて開式して、総長様導師の下、全員で般若心経を唱えたあと、大書院で総長様から御法話を頂いた。昼食のあと、午後からは金閣寺特別拝観をさせて頂いた。晴天に金色に輝く金閣寺利殿を眺めることができた。皆さんしきりとカメラのシャッターを切っておられた。

最後に、茶所でお菓子とお抹茶を頂いて、閉式して、午後二時半、散会した。

第四教区

七月二日 教区住職 法式研修会(於・善應寺)

九月一日 宗務支所 支所会(於・善應寺)

本年度御親教及び本山開山忌団参について協議

九月十九日 宗務支所 御親教習礼(於・眞乗寺)

九月二十七日～二十九日

御親教

眞乗寺、海蔵寺、正法寺、藏身寺、正善寺、南陽寺、妙祐寺、元興寺、園松

をし、坐禅終了後一同で坐禅和讃を唱和した。その後、今年は寺周辺を楽しくウォークラリーをして解散した。

(出席者六十名)

○開山天珪周悦禅師三百年遠諱

十月十日富田寺の開山で出雲相国寺派各山の開山でもある天珪禅師の三百年遠諱が富田寺で厳修された。導師は当時の本山であった京都の興聖寺の長門玄晃老師を拝請し、各山の檀信徒の方々も参列して無事円成した。

萬福寺 先住 故 清厳和尚の寺庭 三代春子さんが七月九日享年九十三歳で逝去された。葬儀は七月十一日、富田寺閑栖和尚の導師のもと厳修された。

寺(九ヶ寺)

十月二十一日 宗務支所 開山毎歳忌団参 相国会員、住職、総勢八十四名が

参拝。

大徳寺「泉仙」にて昼食後、大仙院、北野天満宮宝物殿を拝観。

第五教区

○出雲相国会親子坐禅会

七月二十四日に「夏休み親子坐禅会」を西光寺で開催した。西光院新命和尚、東光寺新命和尚の指導で坐禅



大切な文化財を始め、建物の安全と安心の為努力しています

電気設備工事・消防設備工事

**ADACHI 是立電気工業株式会社**

〒601-8045  
京都市南区東九条西明田町34-21  
TEL 075-681-4461 FAX 075-681-9767  
E-mail: adachi-d@guitar.ocn.ne.jp

<p>大本山相国寺御用達</p> <p>御法衣・仏具</p> <p><b>(株)後藤利法衣店</b></p> <p>〒604-8273 京都市中京区西洞院通三条上ル 電話 (075) 221-4587 FAX (075) 223-0094 フリーダイヤル (0120) 014587</p>	<p>臨濟宗御法衣調達 大本山相国寺御用達</p> <p><b>湯浅法衣店</b></p> <p>〒606-0905 京都市左京区松ヶ崎杉ヶ海道町5-24 電話 (075) 705-2772 FAX (075) 705-2773</p>
<p>大本山相国寺御用達</p> <p>庭園 設計・施工</p> <p><b>樋口造園(株)</b></p> <p>〒602-8341 京・上京区七本松通中立売下ル 電話 (075) 462-1385 FAX (075) 464-6120</p>	<p>大本山相国寺御用達</p> <p>精進料理</p> <p><b>矢尾 治</b></p> <p>〒600-8486 京都市下京区高辻堀川町358 電話 (075) 841-2144 FAX (075) 841-2110 <a href="http://kyoto-shoujinryouri-yaoji.homepage.jp">http://kyoto-shoujinryouri-yaoji.homepage.jp</a></p>
<p>總本山御用達</p> <p><b>藤安田念珠店</b></p> <p>本店・〒604-8072 京都市中京区寺町六角角 電話 (075) 221-3735 (代表) 東京・札幌・福岡 各営業所</p>	<p>文化財堂宇修復保存 大本山相国寺御用達</p> <p>社寺建築 設計・施工 数寄屋建築</p> <p><b>澤甚株式会社 澤野工務店</b></p> <p>本 社 〒605-0069 京都市東山区東大路通知恩院前上ル2筋目東入 TEL (075) 561-5394 (代) FAX (075) 533-3775</p> <p>山科事務所・工房 〒607-8126 京都市山科区大塚元屋敷町62 TEL (075) 541-1257 (F)</p>
<p>貴重な御法衣の御用は 大本山相国寺御用達</p> <p><b>後藤新助法衣仏具店</b></p> <p>〒616-8041 京都市右京区花園寺ノ前町30番地 電話(代表) (075) 462-3915番 ファクシミリ (075) 462-3616番 URL <a href="http://www.rinzai.jp">http://www.rinzai.jp</a> E-mail: <a href="mailto:rinzai@rmail.plala.or.jp">rinzai@rmail.plala.or.jp</a></p>	<p>大本山相国寺御用達</p> <p>社寺建築 <b>(株)北村誠工務店</b></p> <p>〒603-8225 京都市北区紫野南船岡東町45 電話京都 (075) 441-0563 FAX京都 (075) 441-0571</p>



● 編集後記 ●

2010年「円明」正月号をお届けいたします。今年は第三次江上内局三年目の締めくくりの年になります。気を引き締めてがんばって参りたいと思います。

平成十五年から始まりました御親教も今回で七年目になります。第六教区に始まり、第三教区、第四教区の御親教が無事終了いたしました。今号はその第四教区九カ寺の特集です。感想文をお寄せいただいた方々に紙面を借りてお礼申し上げます。

教化活動委員会の研修会も平成11年5月に洗建駒澤大学教授を迎えて始まりましたが、今日まで様々な分野の先生方を迎え、五十回の研修会を開催して参りました。本年度は雑誌やテレビで活躍中の松岡正剛氏を迎えて、仏教の持つ可能性について語っていただきました。様々な人々によって作り上げられてきた仏教思想や仏教文化の懐の深さを、編集という観点からもう一度自分の目にとらえ直すという作業がいかに重要かと言うことを啓発されました。毎回八十人を超える参加者があり、五十回目、十一年目を迎えたこの研修会に花をそえていただきました。この紙面を借りて松岡先生に厚くお礼申し上げます。

2000年7月に開設しました相国寺のホームページは今年で十年目を迎えることとなります。現在ホームページの改訂作業中ですが本年春には装いを新たに、今までより充実したサイトとしてお目見えすることになるとと思います。ご期待ください。  
(佐分 記)

平成22年1月1日

発行所/大本山相国寺・相国会本部

〒602-0898 京都市上京区今出川通烏丸東入相国寺門前町701 TEL 075-231-0301 FAX 075-212-3591  
URL <http://www.shokoku-ji.or.jp> E-mail [kyogaku@shokoku-ji.or.jp](mailto:kyogaku@shokoku-ji.or.jp) (教学部)



なが——い、おつきあい。

貯める、運用する、借り入れる、積み立てる、備える、管理する…  
京都銀行は、人生のさまざまなシーンで皆様を応援します。お気軽にご相談ください。

飾らない銀行

 **京都銀行**  
<http://www.kyotobank.co.jp/>

あなたの、豊かな  
人生のために。

三菱UFJ信託銀行のライフプラン・コンサルティング

三菱UFJ信託銀行は資金運用をはじめとする、  
資産全般にわたる運用のご相談を承ります。

資金の運用

不動産のご相談

資産の管理・承継



三菱UFJ信託銀行 京都支店

〒600-8006 TEL 075-211-7161  
京都市下京区四条通高倉東入立売中之町85番

届出第6号 (社)不動産協会会員 (社)不動産流通経営協会会員 (社)首都圏不動産公正取引協議会加盟



社寺庭園・町屋庭園・露地庭  
作庭 管理

 **長岡造園**

〒616-8305 京都市右京区嵯峨広沢御所ノ内町13-3  
電話 (075) 872-0005 FAX (075) 872-0004

印刷を極め、印刷を超える——

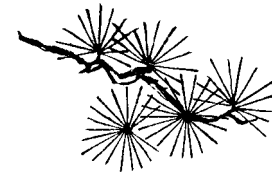
生産力と機動力、開発力と発想力をもって  
「新しい社会に貢献する企業」を目指します。



 **ヨシダ印刷株式会社 京滋営業所**

〒604-8277 京都市中京区西洞院通り御池下ル三坊西洞院町572-4 NOA高松殿ビル6階 TEL.075-252-5421  
[本社]金沢 [支店・営業所・工場]東京・金沢・大阪・富山・福井・京都・静岡 URL <http://www.yoshida-p.jp/>

[www.shoyeido.co.jp](http://www.shoyeido.co.jp)



香



大本山相国寺御用達

香老舗 **松 紫 堂**

京都本社/京都市中京区烏丸通二条上ル東側 〒604-0857 TEL 075(212)5590  
東京支店/東京都中央区日本橋人形町2-12-2 〒103-0013 TEL 03(3664)2307  
札幌支店/札幌市中央区南8条西12丁目3-6 〒064-0808 TEL 011(561)2307

京都本店 産寧坂店・銀座店 人形町店 青山香房・札幌店



先人たちの賜物を伝えていく仕事。

デジタル再製画「伝匠美」 [www.dnp.co.jp/denshoubi/](http://www.dnp.co.jp/denshoubi/)

**DNP**

大日本印刷株式会社 [www.dnp.co.jp](http://www.dnp.co.jp)

御法衣・御袈裟・御水引・戸帳・打敷  
華蔓・御晋山式用品一式・稚児装束

各大本山御用達

## 橘兵 草木兵助商店

〒604-0024 京都市中京区衣ノ棚通御池上ル西側  
電話 (075) 221-0934 番 振替京都 01090-4-3476

## 抹茶

全国並びに関西茶品評会 第一位  
自園茶 農林水産大臣賞 29 回受賞

有馬頼底管長御好

御濃茶 萬年乃翠

御薄茶 常光



大本山相国寺御用達

宇治 久小山園

〈宇治茶製造販売〉

本社 京都府宇治市小倉町寺内 86

伊勢丹店 (0774) 20・0909

西洞院店 シェイアル京都伊勢丹 B1

茶房「元庵」も取り扱い

<http://www.marukyu-kojamaen.co.jp>

大本山相国寺御用達

## 京表具

絵画・墨跡・織物・修理・一般表具一式  
宗紋襖紙・御殿引手 発売元

こう えつ あん  
浩 悦 庵

古文化財保存修理研究所  
矢口浩悦庵

本社・工房 〒602-8025 京都市上京区衣棚通り丸太町上る今葉屋町 318  
TEL(075) 254-6021(代)・FAX(075) 254-6022

東京営業所 〒203-0014 東京都東久留米市東本町9-9 TEL・FAX(0424)72-6239

<http://www.koetsuan.com> E-mail:office@koetsuan.com

## 教化活動委員会活動報告

### ◆相国寺研究

本年後期の研修会は相国寺研究として笹部昌利氏による三回の連続講義をお願いいたしました。「幕末動乱の京都と相国寺」と題して以下の日程で開催されました。

#### テーマ「幕末動乱の京都と相国寺」

講師◎笹部昌利氏

第一回 平成二十一年十一月十一日(水)  
「京からみた幕末の世」

第二回 平成二十一年十一月十八日(水)  
「薩摩藩島津家と相国寺―京の寺院と大名屋敷」

第三回 平成二十一年十二月二日(水)  
「京の『志士』であるところについて」

時間 いずれも 講義 午後一時―二時三十分  
質疑 二時四十分より  
場所 承天閣二階講堂

教化活動委員会委員長 佐分宗順



Your Global Lifestyle Partner

～お客様の感動を創造します～

国内旅行

宇宙旅行

JTB

海外旅行

大会幹旋

JTB西日本団体旅行京都支店

〒604-8152 京都市中京区烏丸通錦小路上ル手洗水町 670 京都フクトクビル 5 階  
TEL:075(241)0139 FAX:075(255)6564

(営業時間 9:30～17:30/土・日・祝日休業)



二条城のほとりに

寛ぎがある

京都全日空ホテル

〒604-0055 京都市中京区堀川通二条城前  
ご予約、お問い合わせは (075) 231-1155  
<http://www.ana-hkyoto.com>

# 妙祐寺

9月29日



記念品を受ける頼川孝生兼務住職



総代荒木猛氏謝辞



境内にある毘沙門堂



## ●講師プロフィール 笹部昌利氏 (ささべ・まさとし)

略歴

一九七一年、京都市に生まれる  
一九九五年、京都産業大学経済学部卒業  
二〇〇〇年、佛教大学大学院文学研究科単位取得満期退学  
文学修士(佛教大学)  
現在、佛教大学文学部・京都産業大学文化学部ほか非常勤講師

主要論文

- 「攘夷と自己正当化」 (『歴史評論』五八九号、一九九九年)
- 「薩摩藩島津家と近衛家の相互的「私」の関わり」 (『日本歴史』六五七号、二〇〇三年)
- 「人斬りと幕末政治」 (『鷹陵史学』三十一号、二〇〇五年)
- 「近世の政治秩序と幕末政治」 (『ヒストリア』二〇八号、二〇〇八年)

相国寺境内にあった薩摩藩邸に関し、相国寺と薩摩藩

とで交わされた文書を中心に、相国寺の参観日記やその他の資料を参考にしながら、当時の相国寺や京都の政治情勢について、解説していただきました。

相国寺をはじめ、寺院の歴史を考えるとき、創建当時の歴史は比較的研究もなされていますが、近世以降、幕末、明治維新から近代、昭和史にかけての研究はほとんどありません。その頃の相国寺はどのように時代をとらえ、どのような展望を持っていたのかを探ることは、大変重要であると思います。明治以降、国家の大きな混乱と大変革の中で、寺は何を捨て、何を守り、どう変革してきたのでしょうか。このような混乱期の歴史を真摯に読み解き検証することなくして、これからの寺院の発展は望めないでしょう。これからの相国寺が保存する歴史資料の整理と解明を通して、これらの問題に光を当てていきたいと考えています。多くの僧侶のご参加をお願いします。

◆講義録  
その他の研修会については現在未定です。決まり次第ご案内いたします。

松岡正剛氏の講義録については本年二月頃発刊の予定です。  
笹部昌利氏の研修会講義録については本年三月頃の発刊予定です。

# 園松寺

9月29日



四教区支所長  
五十嵐祖傳師謝辞

総代湯淺迪哉氏謝辞



管長・総長・教学部長と  
四教区各寺院住職



# 元興寺

9月29日



記念品を受ける本田真人兼務住職



総代隅田啓三良氏謝辞

慈照寺  
 国宝 観音殿  
 保存修理

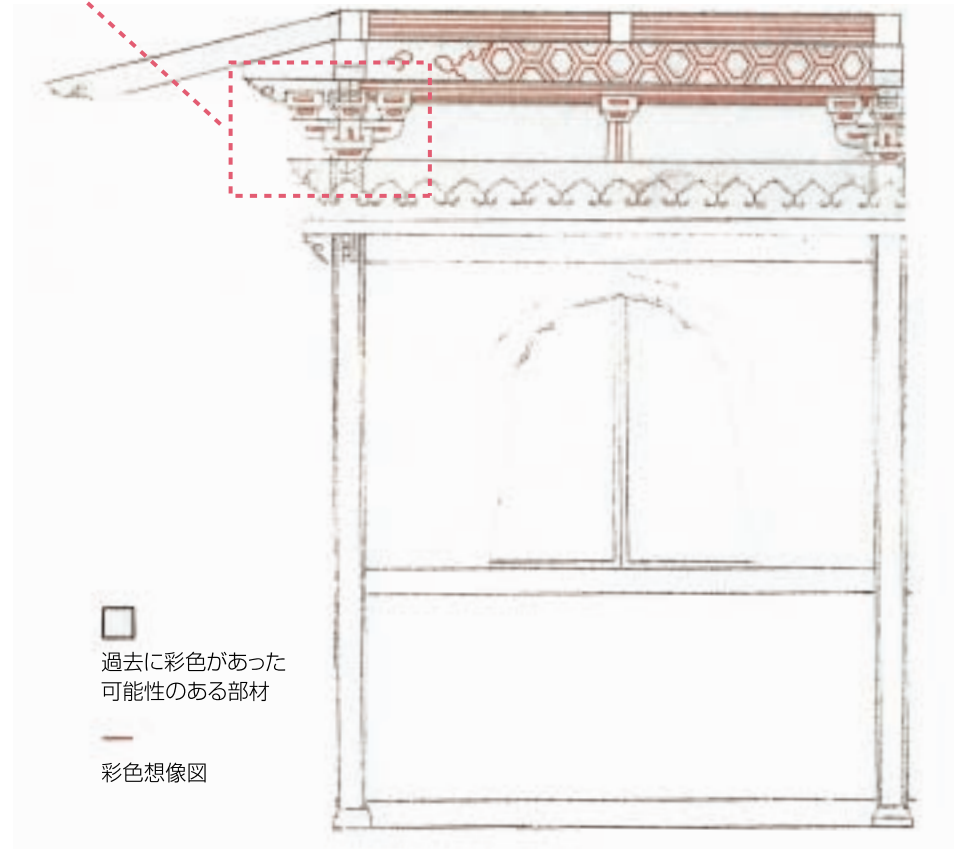


観音殿上層組物に残存していた建築彩色(条帯紋)



観音殿平成21年11月現在の修復状況

「国宝 慈照寺銀閣 上層外部彩色調査」図



承天閣だより

Jotenkaku Museum



テープカット



写真展示風景

# —心と技の饗宴— 山口安次郎作 能装束展

承天閣美術館では平成二十一年九月十四日から十二月六日まで有馬頼底管長が委員を務める「知恵と力の博覧会」の事業の一環として「心と技の饗宴—山口安次郎作能装束展—」を開催いたしました。本事業は西陣屈指の織師である山口安次郎翁の織った能装束一〇五領を展示したものです。

安次郎翁は源氏物語錦織絵巻（一昨年当館で展観）の製作者故山口伊太郎翁の実弟で昨年十月一日で一〇五歳を迎えられました。「晴耕雨織」と自らの織三昧の日常を表現し、今もその手を休める事がありません。また相国寺は、能楽を庇護し、大成させた室町幕府三代将軍足利義満の創建になります。六〇〇年の古を経た今、古都に息づく日本の伝統文化が華麗に披露されました。

九月十三日には承天閣に於いて開会式・テープカットと内覧会が執り行なわれ、山口安次郎氏、門川大作京都市長、麻生純京都府副知事、渡邊隆夫京都商工会議所副会頭、齋藤修京都新聞社長、有馬頼底管長によりはさみがいれられました。そして内覧会の後、相国寺庫裏前で観世清和様、梅若玄祥様により「葵上」「野宮」が演能され、また十月一日には、金剛永謹様・片山九郎右衛門様により「半部」「暮」が催され能ファンを魅了しました。

承天閣美術館事務局長 鈴木景雲



能は観世清和様の葵上

次期展観予定

平成二十一年十二月十三日〜平成二十二年三月二十二日

京都市観光協会 第四十四回京都冬の旅協賛

世界文化遺産 金閣銀閣寺宝展—墨蹟・絵画・茶道具の名品—

平成二十二年四月三日〜六月六日

—江戸最後の名匠—欧米人が愛した柴田是真の漆工と絵画

とわ 永遠の安らぎ —石のカウンセラー—

株式会社 石 杖 都 みやこ

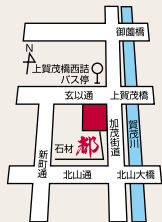


代表 坪田 忠男

年中無休 営業時間/AM8:30~PM6:00 (日曜日PM5:00まで)

本 社：〒603-8103 京都市北区小山北玄以町 24 番地 (上賀茂橋西詰バス停前) ヨクソ ヨイシ 電話(075)491-4114(代)  
工 場：京都市北区上賀茂神山 389 番 24 (洛北病院バス停前) 電話(075)702-2440  
夜 間：京都市左京区岩倉南池田町 117 電話(075)702-8814

御一報次第、遠近を問わず参上いたします。



心のすがた

悠然得佳趣

悠然として佳趣を得る 傳察

何事にも迫らずゆったりとして佳き趣味を領得する

撮影◎大光明寺佳職 矢野謙堂  
北魏石仏・大光明寺